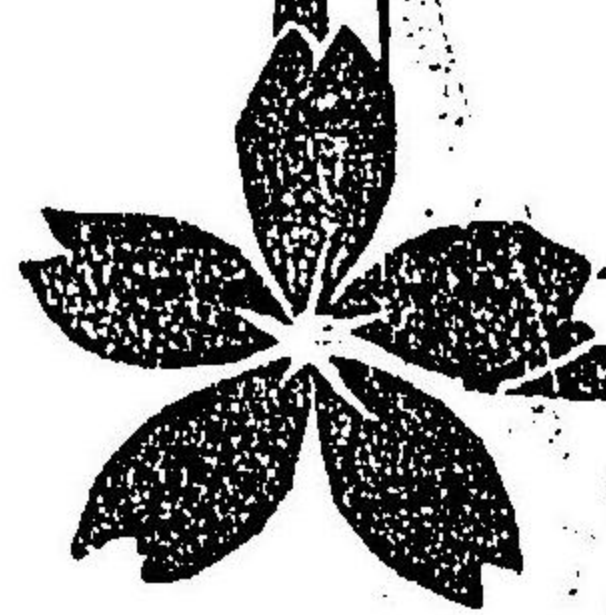
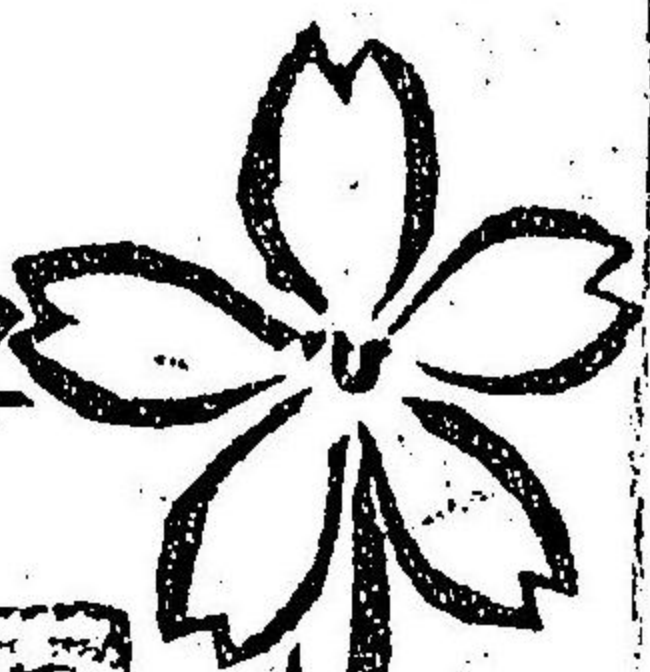


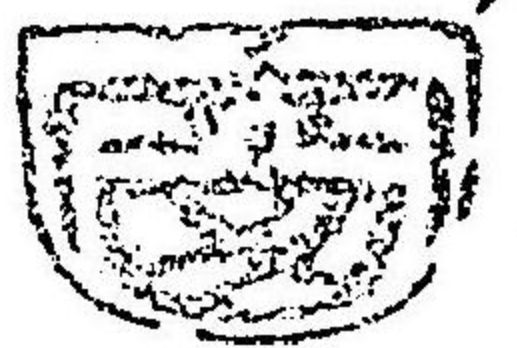
中等  
教育  
國語  
準備  
完



机頭の窓乃雪  
明暮照す支の道  
池中蛟龍時をえは

風雲萬里雄飛む

翠窓學人



明治  
40 3 9  
内交

緒言

一、本書は、高等小學校卒業者が、更に進んで中等程度の國語科の門戸を窺はむとするものの爲めに、その準備として編纂したるものなり、故に本書を名づけて中等教育國語の準備といふ。

一、本書は、曩に、余が門を叩き來りて字を問ひし二三のものに口授せしものあるを、こたひ、その切なる語に従ひ遂にこれを鉛版に付し以て同好者に頒つこととなしぬ。

一、本書は、専ら、學生の自修用に供せむとするものなれば、材料は勿論、説明も亦繁雜を避け、成るべく了解に容易ならしめむことをつとめたり。

一、本書は、章を追ふこと儘に五、即ち五冊の一小冊に過ぎず。人或はいはむ、世に國語に関する字典、嘗て汗牛充棟なるのみならず、五冊冊子の編、果して何の用があるぞ。然り、然れども、余の見る所によれば、今日の學生が讀書し、或は

作文するに當り、多くは假字を輕視するが如き感あり。こは、至竟、假字の研究を等閑に付する結果に外ならざるべし。總べて、讀書にまれ、作文にまれ、只、假字の一字にて、意義の上に死活の別を劃す、是れ余の杞憂に堪へざる所なり。然りと雖も、余固より學淺く才短し、此の書いかで彼の弊を救ひ得べき、況、思ふがままにかいつらねたるものなれば、誤謬の點なしとも測り難し、識者幸に是正の勞を吝むなくば、獨り余の幸なるのみならず、亦、斯道の爲めに慶すべきことになむ。

明治四十年一月天寒く雪ふらむとする夜半

編者識す

中等教育 國語の準備目次

第一章	聲音及文字……………	一	頁
第二章	假字遣……………	三六	頁
第三章	漢字……………	四九	頁
第四章	字音假字遣……………	五六	頁
第五章	誤り易き語……………	六九	頁
附錄	韻文散文		

中等國語の準備

紀本國吉編纂

第一章

聲音及文字

○人の思想を表はす聲音を、言語といひ、言語を寫し出す有形の符號を、文字といふ。

○文字は、我が國語を書き表はすに必要なものにて、これには假字と漢字との二種あり、假字は、單に言語の聲音を表はし、漢字は、一の意味ある言語を表はす。

○假字に片假字と平假字との兩体あり、共に字音と字訓とを藉りて、一は漢字の片傍を採り、一はそが草体を化して圓滑に製作したるものなり、その憑據せし漢字は左の如し。

片假字

- ア 阿音
- イ 伊音
- ウ 宇音
- エ 江訓
- オ 於音

カ 加音      キ 喜音      ク 久音      ケ 氣音      コ 己音  
 サ 散音      シ 氏音      ス 須音      セ 世音      ソ 曾音  
 タ 多音      チ 知音      ツ 通音      テ 天音      ト 止訓  
 ナ 奈音      ニ 仁音      ヌ 奴音      ナ 禰音      ノ 乃訓  
 ハ 半音      ヒ 比音      フ 不音      ヘ 反音      ホ 保音  
 マ 末音      ミ 尾音      ム 牟音      メ 妙音      モ 毛音  
 ヤ 也音      ヲ 以音      ユ 遊音      イ 衣音      ヨ 興音  
 ラ 良音      リ 利音      ル 流音      レ 禮音      ロ 呂音  
 ワ 和音      ヰ 韋音      于 宇音      エ 回音      ヲ 乎音  
 右のうちウは烏、キは幾、ケは个、シは之、チは千、ツは川、鬨および津、ハは  
 八、へは邊、ミは三および美、メは女、ユは由、エは惠、おのくその片傍を取  
 りて作れりなぞいふ論あれど、こゝには古より傳れる説のまゝを掲ぐるなり。

平 假 字

あ 安音      い 伊音      う 宇音      江 江訓      お 於音  
 か 加音      き 幾音      く 久音      け 計音      こ 己音  
 さ 左音      し 之音      す 寸音      せ 世音      そ 曾音  
 た 太音      ち 知音      つ 鬨音      て 天音      と 止訓  
 な 奈音      に 仁音      ぬ 奴音      ね 禰音      の 乃訓  
 は 波音      ひ 比音      ふ 不音      へ 反音      は 保音  
 ま 末音      み 美音      む 武音      め 女訓      も 毛音  
 や 也音      や 以音      ゆ 由音      え 衣音      よ 興音  
 ら 良音      り 利音      る 留音      れ 禮音      ろ 呂音  
 わ 和音      ゐ 爲音      字 宇音      ゑ 惠音      を 遠音  
 右の圖中へは反、つは鬨の草略体とはいへ少しも似よりたりとも思はれず、され

ば古より諸説ありて或は神代文字より來れるなりなと論ずれど、これはた確ならず。

右の假字を清音五十音圖といふ、此の中にて文字の區別を立てざるものあり。右は阿也兩行に通じ、ト フ ク ハ ニ ハ イ イ ウ エ ニ テ 兼 ぬ。

○五十音を表はす文字に異體のものあり。

片假字

子、ネ

井、井

平假字

ゆあ、おれ、あらか、おき、とく、あけ、まこ、はささ、  
まじ、はすます、させ、せそ、あさた、ちち、はりつ、て  
て、とと、あふな、あよに、あれ、乃はの、あそのは、を  
ひ、あへ、あるは、あま、あそみ、あむ、あめ、あも、

ゆめ、まよ、あり、さる、まれ、あを、

○此の外に二意を合したる假字あり。

平假字

と(こと)

か(より)

え(なり)

片假字

ト(コト)

片(トキ)

片(トモ)

ナ(シテ)

○清音に對して、濁音、半濁音といふがあり。

片假字

平假字

加行	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	が	ぎ	ぐ	げ	ご
佐行	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
多行	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	だ	ぢ	づ	で	ど
波行	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ば	び	ぶ	べ	ぼ
ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列	

右を濁音といふ。

パ ビ プ ベ ポ ば び ぶ べ

右を半濁音、又は次清音といふ。

○濁音、半濁音には、本濁と、連濁との別あり。本濁とはこの音の自然のものにしてにじ(虹)かせ(風)かつば(合羽)ぎり(義理)あどのじせばぎの如し。連濁とは、二語の合して熟語となれるとき下なる清音の濁ることあるをいふ。「し」と「はし」と連りいしばし(石橋)となり、「おもひ」と「はかり」と連りおもんばかる(慮)となり「きん」と「へん」と連りてきんべん(近邊)となるが如し。

○清音五十音、及び濁音、半濁音とも、ア列にある音は之を長く發音すれば皆アといふ韻あり、又イ列、ウ列、エ列、オ列にもイ、ウ、エ、オといふ韻あり、即ち阿行の五音は口を開きて聲を發すれば單純に出づ、因てこれを單純音又は母韻ともいふ。○又くウよりウを引き去りたるが如き韻を發聲又は父音と名づく。假令ばガクカウのクの如きものなり。父音は阿行を除き、清音、濁音、半濁音とも一行に一ツ

づゝあり。故に其の數は十四あれども之を表はすべき文字なし。

○單純音(母韻)は發聲(父音)の韻となりて相熟して始めて音と成る。この故に加行以下の九行四十五音を成熟音又は子音ともいふ。

○各行發聲の別、發聲は、氣息又は聲の口内の諸機關に關係して起るものあり。

加行の發聲は、喉頭と舌根とに激して發す、而して五母韻と配合すれば、此の行の五音を成す。

佐行のは、舌尖前齒に觸れて發す。

多行のは、舌尖上齶に當りて發す。但今世の發聲にてはちつのは上齶に當ること弱し。

奈行のは、舌尖上齶を撫で鼻に通じて發す。

波行のは、喉戸に觸れて發す。但今世の發聲にては、ふ獨り唇に觸る。(奥羽北陸山陰の土音にては、五音ともに唇に觸る)。



末行のは、重く唇を開閉して、鼻に通じて發す。  
 也行のは、喉頭と舌面とに關して發す。  
 良行のは、舌尖、上齶を摩擦して發す。  
 和行のは、軽く唇を開閉して發す。

							發 聲 母 韻
N	D	T	Z	S	G	K	あ
な	だ	た	ざ	さ	が	か	a
Na	Da	Ta	Za	Sa	Ga	Ka	a
に	ぢ	ち	ぢ	し	ぎ	き	い
	Di	(Ti)		(Si)			i
Ni	Zi	Tsi	Zi	Shi	Gi	Ki	i
ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う
	(Du)	(Tu)					u
Nu	Zu	Tsu	Zu	Su	Gu	Ku	u
ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え
Ne	De	Te	Ze	Se	Ge	Ke	e
の	ど	と	ぞ	そ	ご	こ	お
No	Do	To	Zo	So	Go	Ko	o
成熟音							單純音

○半母韻 也行の發聲は、甚、阿行のいに似、和行の發聲は甚、阿行のうに似て、  
 更に之に母韻を添へて、二母韻相重りて發するものゝ如し、さればこの二行の音  
 は、拗音の韻ともなりて、半母韻の名あり。阿行のいゝと、也行のいゝと、和  
 行のうゝと、古來同一の假字を相通はし用ひ來れども、其の實阿行の音は、單純

W	R	Y	M	P	B	F
わ	ら	や	ま	ぱ	ば	は
Wa	Ra	Ya	Ma	Pa	Ba	Ha
ゐ	り	い	み	び	び	ひ
(Wi)		(Yi)				(Fi)
i	Ri	i	Mi	Pi	Bi	Hi
う	る	ゆ	む	ぷ	ぶ	ふ
(Wu)						
u	Ru	Yu	Mu	Pu	Bu	Fu
ゑ	れ	ゑ	め	ぺ	べ	へ
(We)		(Ye)				(Fe)
e	Re	e	Me	Pe	Be	He
を	ろ	よ	も	ぼ	ぼ	ほ
(Wo)						(Fo)
o	Ro	Yo	Mo	Po	Bo	Ho



きや、	きゆ、	きよ、
しや、	しゆ、	しよ、
じや、	じゆ、	じよ、
ちや、	ちゆ、	ちよ、
ぢや、	ぢゆ、	ぢよ、
にや、	にゆ、	によ、
ひや、	ひゆ、	ひよ、
びや、	びゆ、	びよ、
みや、	みゆ、	みよ、
りや、	りゆ、	りよ、
くわ、		

上の拗音の「きや、きゆ、きよ」「しや、しゆ、しよ」「じや、じゆ、じよ」「ちや、ちゆ、ちよ」「ぢや、ぢゆ、ぢよ」「にや、にゆ、によ」「ひや、ひゆ、ひよ」「びや、びゆ、びよ」「みや、みゆ、みよ」「りや、りゆ、りよ」が、く、こ又は「さ、す、そ」「ぞ、ず、ぞ」等の音を直音と稱す。(他は推して知るべし。)

ぐわ、

○**撥音** この音は撥ぬる音にて、口を閉ぢ、氣息を鼻に通じて押し出すが如き音なれば、又鼻音ともいふ。獨立しては出でず、他の音の下に付きて出づ。例へば、ふんてん(文典)、うんざん(運算)などの如し。片假字にてはン、平假字にてはんを借りて用ふ。

○**促音** この音は急促りたる發聲にて、亦、單獨には出でず、他の二音の間に生ず。例へばたつしや(達者)べつたう 別當などの如し。片假字にてはッ、平假字にてはつを借りて用ふ。

○**轉呼音** 假字を其の本分の音に呼ばずして、他の音に轉じて呼ぶをいふ。はの名を記して、わの如く呼ぶことあり。又ひふへほをいうねおの如く呼ぶことあり、是等は發聲黙して母韻のみ發するものにて、他の音の後にあるときに發し首に發することなし。

わは(粟)	いひ(飯)	くふ(食)	はへ(蠅)	かは(顔)
かはる(變)	かはづ(蛙)	わたひ(價)	もふべ(夕)	かあへ(鼎)
わへて(敢)	おほし(多)	さいはひ(幸)	いきはひ(勢)	

轉呼音の假字には、標識を用ひざれば、紛れ易きもの多し。

そこひ(内障眼)と、そこひ(際涯)、  
 きふさん(寄附金)と、きふさん(給金)  きふう(氣風)と、きふう(急雨)、  
 阿列の音は(直、拗、清、濁、共に)下にう又はふ(轉呼音の)を受ければ、於列の  
 音の如く轉呼することあり、その中の成熟音あるは、發聲を存して、母韻をおに  
 變ずるなり、此の轉呼音は開口にも發し、他の音の後にも發す。

わうむ(鸚鵡)	わふみ(近江)	.....
かうべ(首)	かふ(買)	きやう(京)
さうし(草紙)	さふらふ(候)	しやう(商)

たうげ(峠)	たふとし(貴)	ちやう(町)
なう(腦)	そなふ(備)	.....
はうむる(葬)	はふ(這)	ひやう(評)
まうす(申)	まふ(舞)	みやう(明)
やうか(八日)	もやふ(紡)	.....
まらうど(客)	とらふ(捕)	りやう(兩)
うれふ(憂)	わう(王)	くわう(光)

右に擧げたる諸語の下なるうふを、今はおの如くにも轉呼し、又、

おふし(睡)	おとらと(弟)	をうな(女)	きやう(興)	りやう(龍)
--------	---------	--------	--------	--------

等の於列の音の下なるうふをもおの如く轉呼す、又、

あふく(仰)	あふひ(葵)	あふり(泥障)	たふる(倒)
--------	--------	---------	--------

なごのふもおの如く轉呼す、又、

あふぎ(扇)      あふみ(近江)      かははね(骨蓬)      あかは(赤穂)  
 あかを(赤魚)      あをめ(青梅)      まをか(真岡)

などもあり、されど是等は、皆訛音にて轉呼音にはあらずるべし。

○連聲 阿、也、和三行の音はひぬ(鼻音に變じ)つ(促音に變じ)の下に連なるときは、上の發聲に連れて轉呼することあり、之を連聲といふ。

なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)	おひやうじ(陰陽師)	おひやうじ(陰陽師)	
しんあん(新安)	さむゐ(三位)	はんあみ(本阿彌)	しんあい(親愛)
せんあく(善悪)	ぎんあん(銀杏)	しんい(瞋恚)	ゐんいん(延引)
うんらん(云々)	まんゑふ(萬葉)	いんゑん(因縁)	くわんおん(觀音)
さんよう(算用)	げんわ(元和)	しんわう(親王)	くわんゐん(官員)
りんる(輪廻)	あんをん(安穩)	はつい(發意)	けついん(厥陰)
けつたき(關腋)	せつおん(舌音)	せついん(雪隱)	もんゐん(門院)

しんゐん(新院)      かんゐう(肝要)      さんよ(贊譽)

さく<sup>レ</sup>の音を、促聲の如く轉呼することあり、亦連聲あり。

せきこむ(急込)	ひきばる(引張)	ひきさぐ(提)	いくか(幾日)
はくか(薄荷)	がくかう(學校)	かくけ(脚氣)	はくぼう(北方)
ろくべん(六遍)	どくば(獨歩)	せきけう(石橋)	らくくわ(落花)

(注意)

一、斯く連聲にいふ語は、習慣による、あらゆる場合皆連聲となるにあらず。但聲音にのみ變化の生ずるものにして、音便、通音の如く、音標文字までも書きかふるものにあらず。

二、凡そふつ<sup>レ</sup>くち<sup>レ</sup>ぎの五音も加、佐、多、波、四行の音に接するときは、多くは促音とある、促音となしたる時は假字をもつに易へて記すべし。

しゆつぱん(出帆)      かふかう(恰好)      かふちう(甲冑)      にふたう(入唐)

なふしよ(納所) はふど(法度) にちばん(日本) にちくわう(日光)  
じふぼう(十方)

○約音 連聲の便によりて二音を一音に約むるものを、約音といふ。その約まるに  
も、一定の方法ありて亂ることなし、この法を反切といひ、その反切する所の  
二音の上なるを父位といひ、下なるを母位といひ、その反切せる音を歸音といふ。  
さてこの反切に、左の三の場合あり。

一、縦反、父母兩位同行中にある場合、

た ち父 づ て母位 ぞ  
位 歸音

父母兩位共に同行中にあるときは、母位の音を以て歸音とす。例へばもちて(以)  
の約まりてもととなるが如し。此の例甚少し。

二、横反、父母兩位同韻列にある場合、

あ い う ね お 父位 歸音

父母兩位共に同韻中にあるときは、父位の音を以て歸音とす。例へばおほぢ(大)  
父の義にて祖父)の約りておぢとなるが如し。此の例亦甚、多からず。

三、角反、父母兩位異韻列にある場合、

か母 け こ  
さ歸音 し父位 す せ そ  
き く

父位母位異韻列にあるときは、父位と同行にして母位と同列に當る音を以て歸音  
とす。例へば、しかれば(然)のさればとなるが如し、この例最も多し。

此の外に父母の兩位とも同行同列なるときは、直にその音を以て歸音とす。こは  
例をたて、之を座切といふものあれども、こは略音に屬すべきものなれば、こ  
には省さぬ。

左の諸例は皆約音なり、

原音	約音	原音	約音
さしあぐ、差上	さゝぐ、捧	もちあぐ、持上	もたぐ、搥
てわらひ、手洗	たらひ、盥	やつこわれ、奴吾	やつがれ、僕
といふ、ト云	ちふ	わがいも、我妹	わぎも
あはらみ、淡海	あふみ	あまおり、天降	あもり
すくなね、少兄	すくね、宿禰	ゆきいね、雪消	ゆきげ
みじある、	みざる、不見	まれにあり、	まれなり、稀
たゝきあひ、敵合	たゝかひ、戰	うまうち、馬打	むち、鞭
かねうち、金打	かねち、鍛冶	とよつおみ、豊臣	とよとみ
にしきおり、錦織	にしこり、	とこいは、常磐	とこいは
つたへ、傳	つて、	にあり、ニ有リ	なり

此等皆慣例あるものにて、如何なる意をも、恣に約せらるゝものにあらず。

○延音 約音と正しく相反す、一音を延べて二音となしたるものなり、されば此の二音を反切の法に由りて約むるときは、皆原音にかへるなり。音を延ばすには、其の行の第一と加行波行又は佐行の同列音とを假るものなり。

原音	延音	原音	延音
云ふ	いはく	申す	申さく
見む	見まく	待つ	待たく
思へる	思へらく	飽かぬ	飽かなく
笑み	笑まひ	歎き	歎かひ
移る	移らふ	御座す	御座さふ
もみぢ	もみぢひ	足る	足らふ
摘む	つます	立つ	立たす
足る	足らす	聞く	きかす

延音は古は敬意を表はさむ爲めに用ひ、又は歌の文字を充たさむ爲めに用ひたる  
など皆慣例あることなれば、恣に一音を二音に呼びなすは宜しからず。

○略音 連聲の便によりて、自然と一音の略せらるゝものをいふ。その省略せらるゝ音は左の如し。

- 一、母韻及び伊列中きしちにひしの六音、
- 二、同音の二ツ重なるもの及び良行、

(イ) 母韻の省かれたる例

原音	略音	原音	略音
やまわがた、山縣	やまがた	かはあひ、河合	かはひ
けあさ、今朝	けさ	ますあらを、益荒雄	ますらを
あかいし、明石	あかし	いづいし、出石	いづし
かりいは、假菴	かりは	ほしいひ、乾飯	ほしひ

なるうみ、鳴海	なるみ
をのうへ、尾上	をのへ
うゑもん、右衛門	ゑもん
みちのおく、陸奥	みちのく
よもぎあふ、蓬生	よもぎふ

(ロ) 伊列の省かれたる例

かはうち、河内	かはち
おほうち、大内	おほち
やまうしろ、山背	やましろ
ひおき、日置	ひき
かさおきやま、笠置山	かさぎやま

原音	略音
やなぎかは、柳川	やながは
ひきはぎ、引劔	ひはぎ
つきこもり、月隠	つごもり、晦
あしくら、足座	あぐら、跪
のきばし、軒端	のきば

原音	略音
つばきいち、椿市	つばいち
とぎばかり、時計	とばかり
あしだち、足立	あだち
あしふみ、足踏	あふみ、踏
はちす、蓮	はす



くちどく、口解	くどく	うちどねり、内舎人	うどねり
くにす、國栖	くす	かにもり、蟹守	かもり、掃部
とみやま、富山	とやま	すみすり、墨磨	すすり、硯
はやひと、隼人	はやと	ゆみげ、弓削	ゆげ
しらがみ、白髪	しらが	あにきみ、兄君	あにき

(ハ) 同音の重りて省かれたる例

原音	略音	原音	略音
とまる、止	とまる	かははら、河原	かはら
たびひと、旅人	たびと	かななべ、金鍋	かなへ、鼎
みづつく、水漬	みづく		

(ニ) 良行の省かれたる例

原音	略音	原音	略音
なぞらふ、準	なぞふ	さらば	さば
まがりたま、曲玉	まがたま	かりの、狩野	かの
まかりで、罷出	まかで	とりとり、鳥取	ととり
かぶりき、冠木	かぶき	くすりたま、薬玉	くすたま
かへるさ、歸	かへさ	かへるで、楓	かへで
たれ、誰	た	さいれなみ、小波	さいなみ
たはれわざ、戯業	たはわざ	こゝろち、心地	こゝち
ところ、所	とこ	をろがむ、拜	をがむ

○通音及び通韻 通音とは、同行の他の音に呼びかふるものにして、通韻とは、同列の他の音に呼び易ふるものなり。我國の音聲は變化極りなしと雖、常にかく一定の法則ありて、決してその行列を紛亂することなし。今これらの例を左に示さむ。

(イ) 同音相通したる例。

原音	通音	原音	通音
あたご、愛宕	おたき	いづこ、何處	いづく
いくとし、幾歲	いくとせ	はやち、早風	はやて
うのはら、海原	うなばら	ひのは、火穂	ほのは、焰
まなか、真中	もなか	いめ、夢	ゆめ
まるし、圓	まるし	みやまふ、敬	うやまふ
いを、魚	うを	おき、息	いき
うばら、荊	いばら	ありき、歩	あるき
たをわ、嬋妍	たわわ	きがね、黄金	こがね

(ロ) 同韻相通したる例

原音	通音	原音	通音
あれ、吾	われ	せばし、狭	せまし
さびし、淋	さみし	けし、消	けち
けぶり、煙	けむり	かたぶく、傾	かたむく
すべらぎ、皇	すめらぎ	にひなべ、新嘗	にひなめ
とばし、乏	ともし	をとこ、男	をのこ
はるあめ、春雨	はるさめ	こきばく、若干	そきばく

漢字の音を呼ぶにも亦右の法に従ひて、節會をせちるゝ、消息をせうそこ、紫苑を  
しをに、燈心をとうしみといふ。

(附記) 「ことばの泉」には、右の中の火穂、黄金、春雨などを轉音として通音と區  
別せり、されど、こゝには別に區別を立てず。

○音便 連聲の便より言語上にあらはれたるある音の變じ、略かり、急促り、添は  
りてよべる音を音便といふ。こは我が國の王朝時代に始まれる一種の詛言なりし

を、爾後、代々に言ひ継ぎ語り傳へて今は雅言とひとしく用ひらるゝに至れり。  
但、音便は一語の首に發せず。

音便を分ちて四類とす、即、い音便(いぎなるもの)う音便(うきなるもの)う音便(うきなるもの)う音便(うきなるもの)  
(い、う、え、お、か、け、こ、さ、た、な、の、う、ま、み、む)  
撥音便(びに、み、等の)促音便(ち、ひ、り、の、促)(音なるもの)是れなり。

一、う 音便

原音	音便	原音	音便
かみかき、髮搔	かうがい	きさき、皇后	きさい
さきくさ、三枝	さいくさ	さきたま、埼玉	さいたま
ささなむ、阿責	さいなむ	さきはひ、幸福	さいはひ
すきかき、透垣	すいがき	つきたち、朔	ついたらち
つきたて、衝立	ついたらて	ふさかは、鞆	ふいがら
かきて、書	かいて	こぎて、漕	こいて

あした、朝	あいた	くし、申	くし
わたくし、私	わたくい	もてなして、饗應	もてないて
さして、指	さいて	まして、況	まして
よきかな、善哉	よいかな	つたなきふで、拙筆	つたあいふで

(注意) 書ひて、漕ひで、指ひて、善ひかぢ、つたなる筆、など書くは、誤なり。

二、う 音便

原音	音便	原音	音便
かかぶり、冠	かうぶり	かくし、格子	かうし
どかく、左右	どかう	さくし、冊子	さうし
ぞく、族	ぞう	ひやくし、拍子	ひやうし
はくでう、北條	ほうでう	わらぐつ、鞋	わらうづ
やうやく、漸	やうやう	もかく、冒額	もかう

かぐはし、馨	かうばし	ながく、長	ながう
まつたく、全	まつたう	うれしく、嬉	うれしう
ははき、箒	はうき	かはほり、蝙蝠	かうほり
かはほね、河骨	かうほね	ふきかは、韃	ふいがう
かはの、河野	かうの	かはたけ、皮茸	かうたけ
ははそ、柞	はうそ	ははこぐさ、母子草	はうこぐさ
こまひと、高麗人	こまうと	まひと、真人	まうと
おひと、首	おうと	いもひと、妹人	いもうと
あきびと、商人	あきうと	せひと、兄人	せうと
おとひと、弟人	おとうと	まれひと、客	まらうと
あづまびと、東人	あづまうと	たびびと、旅人	たびうと
なかひと、媒灼人	なかうと	かりびと、獵人	かりうと

とひて、問	どうて	のごひて、拭	のごうて
はふし、法師	はうし	さふらふ、候	さうらふ
まへつきみ、卿	まうちきみ	つかへまつる、仕奉	つかうまつる
なほし、直衣	なうし	なほらひ、直會	なうらひ
たまはり、賜	たうはり	かみかき、髪搔	かうがい
こみち、小路	こうぢ	かみつけ、上野	かうづけ
てみづ、手水	てうづ	かみへ、神戸	かうべ
かみべ、頭	かうべ	こかみ、小督	こがう
かみより、紙捻	かうより	をみな、女	をうな
かみなぎ、巫	かうなぎ	たたみがみ、疊紙	たたうがみ
かむし、柑子	かうし	ひむか、日向	ひうが
たむけ、手向	たうけ	たむのみね、多武峰	たうのみね

こむや、紺屋	こうや	やゝやゝ、漸	やうやう
とりいて、取出	とうで	まゐで、参出	まうで
まをす、申	まうす	やまだ、山田	やうだ

(注意) 長ふ、嬉しふ、全ふ、問ふて、拭ふて、と書くは誤なり。

三、撥音便

原音	音便	原音	音便
をうな、女	をんな	かなきぬ、金巾	かなきん
あきひと、商人	あきんど	かみざし、簪	かみざし
いかに、如何	いかに	たはは、丹波	たんば
きぬた、砧	きんた	きぬがき、絹垣	きんがい
わらはべ、童部	わらんべ	もひどり、主水	もんどり
おもひみる、惟	おもんみる	ほとほと、殆	ほとんど

ふみて、筆	ふんで	あそみ、朝臣	あそん
いみべ、忌部	いんべ	おほみ、大御	おほん
かみなぎ、巫	かみなぎ	のみと、喉	のんど
ゆみて、弓手	ゆんで	ひむかし、東	ひんがし
ねもごろ、懸	ねんどろ	かりな、假字	かんな
くだり、件	くだん	しりがり、殿	しんがり
あるべし、可有	あんべし	かみぬし、神主	かみぬし
しにて、死	しんで	はげみて、勵	はげんで
とびて、飛	とんで	かるくす、輕	かるんす

四、促音便

原音	音便	原音	音便
かちて、勝	かつて	おひて、追	おつて

うりて、賣 うつて ぶりて、由 よつて  
右の外に、濁音、半濁音に變ずるものと、他音に撥音を添ふるものと、撥音を省きて呼ばざるものと、他音にいを添ふるものと、他音にうを添へて呼ぶものとの五つあり。

一、濁音、半濁音に變ずる例

つきづき 月々、 ときどき 時々、 もつばら 専、  
ふんばつ 憤發、 そんなび 尊卑、 しもつび 出費、  
なんぶう 南風、 けんべい 權柄、 につばん 日本、  
いつべん 一片、 でんぼ 田畝、 ひつぷ 匹夫、

二、他音に撥音を添ふる例

原音 音便 原音 音便  
まな、真字 まんな ずは、不者 ずんば

ぶご、豊後 ぶんど びご、備後 びんど  
みなみ、南 みなみ まなか、真中 まんなか  
まさら、真更 まんざら ままろ、真圓 まんまろ

三、撥音を省きて呼ばざる例

原音 音便 原音 音便  
もんど、文字 どもど ほんい、本意 ほんい  
おんない、案内 おんない ねんぶつ、念佛 ねんぶつ

四、いを添ふる例

原音 音便 原音 音便  
きのくに、紀國 きいのくに けし、家司 けいし  
しか、詩歌 しいか しご、四時 しいと  
ひき、鼠負 ひいき むか、六日 むいか

五、うを添へて呼ぶ例

原音	音便	原音	音便
さくわん、左官	さうくわん	たぶ、賜	たうぶ
によくわん、女官	にようくわん	によばう、女房	にようばう
ふ、夫婦	ふうふ	はご、反故	ほうご
まく、説	まうく	やか、八日	やうか

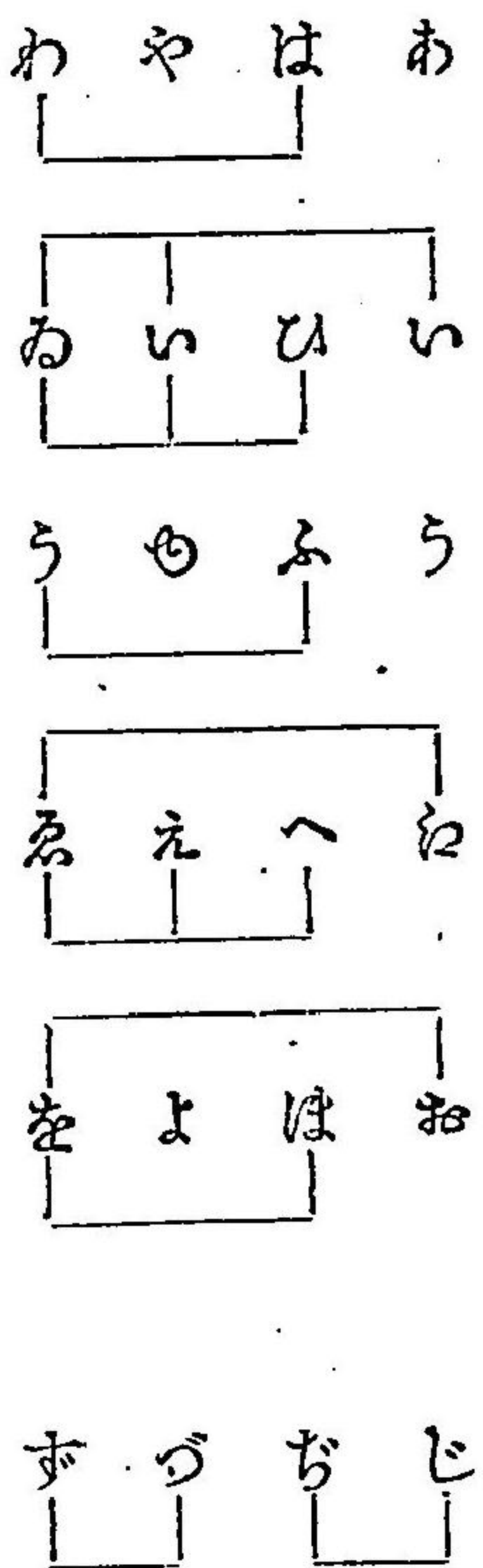
此の外尙多かれど、右に挙げたる諸例に照さば、自ら知らるべし。

第二章 假字遣

國語を假字文字にて書くときに、用ふべき假字の用法を國語假字遣といふ。例へば、  
鐵はくは、泡はあわと書き、家はいへ、杖はつると書き別くるが如し。  
假字遣をたやすく覺むむには、紛れ易き語を類別し、その内にて少き方を記憶し置きて、他をば推知するを便とす。例へば、いと書くべき假字二百五十ありてゐどか

くべき假字二十にも足らぬとき其の十分の一にも足らぬ少き方を暗記して、其の他のはいの假字なりと推して知る類の如し。

清音、濁音共に紛れやすき假字を左に示さむ。



「は」は詞の上に在りて紛はしきもの、「い」は中と下とに在りて紛はしきものなり。

わ語の上にありては紛るゝことなけれども、中と下とにありてははに紛るることあり。次ぎに出せる外ははの假字と知るべし。

- あわつ 周章、 さわぐ 騒、 かぬく 乾、
- ことわり 理、 ことわざ 諺、 しわざ 作業。

たわやか 嬋妍、	さわやか 爽、	はらわた 腸、
このわた 海鼠、	いわし 鱒、	よわき 弱、
こわいろ 聲色、	たわむ 撓、	くわぬ 慈姑、
うわる 植、	すわる 坐、居、	たわら 俵、
いわけなし 幼稚、	すわえ 條、	たわやめ 手弱女、
のわき 野分、	とりわけ 特、	しわし 吝、
あ わ 泡、	し わ 皺、	ひ わ 鵝、
くるわ 廓、	くつわ 轡、	おほわ 輶、
み わ 酒瓮、	うらわ 浦曲、	いわう 硫黄、

む 語の上にありてはいに紛れ、中と下とにありてはいに紛ることあり。  
 む 井、猪、居、蘭、亥、堰、 む や 禮、  
 む な か 田舎、 む ざ り 膝行、 む も り 鯨、

ゐのこ 豕、	ゐさらひ 臂、	ゐしき 尻、
ゐながら 座、	ゐせき 堰埭、	ゐる 率、以、帥、將、
ひきゐる 率、將、帥、	もちゐる 用、須、	まゐる 參、
うなゐまつ 馬鬣松、	はらゐせ 報怨、	うなゐご 髻髮子、
あ む 藍、	くれなゐ 紅、	あぢさゐ 紫陽花、
くわぬ 慈姑、	くらゐ 位、	な む 地震、
かたゐ 乞食、	もどゐ 基、	しほさゐ 潮騒、
こしゐ 躰、	はかゐ 行器、	いぬゐ 乾、
とりゐ 鳥居、	どのゐ 宿直、	まどゐ 圓居、
かもゐ 鴨居、	くもゐ 雲居、	しばゐ 芝居、
はしゐ 端居、		

い 一音の語或は語の上にあるときはいに紛れやすけれども前のゐ部の外は、皆い



の假字ありを知るべし。又語の中と下とにあるときはむひに紛るゝことあり、故にこゝに出せるいと書くべき外は、皆ひの假字なりと知るべし。

- かいぞへ 介添、 おいかけ 綏、 のいすみ 肉刺、
- さいづち 終樸、 さいたて 戲射、 ひながい 鞅、
- かい 攪、 うまい 熟睡、 か い 魃、
- お い 老、 く い 悔、 ひくい 報、
- やいと 灸、 はいがた 鶴、 かうがい 筭、

(注意) この他に、こいし、磯。まないた、組。ひらびる、秀。などの、二語を一語のやうに呼べるものは、用ふる時注意すれば、紛るゝものにあらす。

又音便より來れる多くのいもこゝには一々記さす。

う語の上にありては紛るゝことなけれども(筆と腕と、畝と舟と)中と下とにありてはふに紛るゝことあり、然れども左の三語とう音便との外は、皆ふの假字と知

るべし。

- う り 飢、 う り 植、 す う 据、

ゑ語の上にありてはえに混れ、下にありてはえへに紛るゝことあり、但、中にありてゑと書くべき語はなし。すゑぶる、据風呂。の如きは二語の一語に呼ばるゝものなり。

- ゑ 餌、繪、穢、 ゑぐし 醜、 ゑ む 笑、
- ゑ ふ 醉、 ゑぼし 烏帽子、 ゑくぼ 簪、
- ゑ る 彫、鐫、 ゑつは 笑壺、 ゑがは 笑顔、
- ゑなく 呻吟、 ゑづく 嘔吐、 ゑ た 穢多、
- ゑさし 餌差、 ゑかき 畫工、 ゑどる 彩色、
- ゑのぐ 繪具、 ゑ ま 繪馬、 ゑんじゆ 槐、
- ゑんば 蜻蛉、 ゑどり 屠兒、 ゑんどう 豌豆、

るんず 怨	るかう 回向	るる 嘲
こる 聲	うる 植	する 末、据、陶、假髮
こずる 梢	つくる 机	つる 杖
ゆる 故	ともる 巴	いしする 礎
ゆるん 所以	ちる 智慧	る 匕、衛士
うるき 盈裁	うる 飢	するひろ 扇子
くゑまり 蹴鞠		

え 一音の語或は語の上にあるときはるに紛る、されど前のる部の外は皆えの假字なり。又中にあるときはへに紛れ(語の中にあるとかくべきはなし)下にあるときはるにもへにも紛るゝものなり。(るど書くべきものはる部に出せり)。

もえぎ 萌黄	ふる 笛	ぬえ 鷓
さいえ 蝶螺	はえ 鮓	きのえ 甲

ひえ 稗	すわえ 楚	ひこばえ 藁
すみのえ 住吉	あこえ 距	ながえ 鞆
ゆふばえ 夕榮	こころえ 心得	さすえ 椀
しづえ 下枝	いりえ 入江	ひえどり 鶺鴒
ささえ 少筒	ざえ 才	

この外にえと書くべきは、也行下二段活の動詞なり。例へば(也行、え、え、ゆ、ゆる、ゆれ)肥え、絶え、冷え、見え、生え、聞え、煮え、燃え、越え、肖え、等のごとし。

を 一音の語或は語の上にあるときはおに紛れ、中と下とにありてはほに紛るゝものなり。

を 尾、芋、緒、(雄、男、牡)、小(岑、丘)、唯	をか 岡、陸、阜、陵
を ぎ 荻	をか し 可笑、可憐、憫マシキ也

をぎ招、	をす食、	をり折、檻、居、節、
をかむ拜、	をかす犯、	をぐな童男、
をこ愚戯、痴、	をこじ臆、	をどる驕、奢、
をさ長、譯語、	をさ箴、	をざし鯪、
をさなし幼稚、	をさむ治、納、收、	をし鴛鴦、
をさく大抵、	をたけび雄詰、	をし惜、愛、
をしかは章、	をしき角盆、折敷、	をしね小稻、
をかづき鹿鼠、	をしへど弟子、教子、	をそ獺、
をそ虚言、	をち遠、	をち老翁、
をんあ女、	をつと夫、	をひ甥、
をとめ少女、	をけ桶、	をの斧、
をどり踊、	をめき叫、	をのき戰慄、

をばり終、	をち伯叔父、	をどり媒鳥、
をろち大蛇、	をけら氷、	をつゝ現在、
をどつひ一昨日、	かざる薫、	たを嶺、峠、
ひを氷魚、	めをと夫婦、	しをり乗、
しをる菱、	しをる呵責、	たをやか嬋妍、
ひをむし蛸、	やをら徐々、	まをす申、
わざをき俳優、	あを青、	いさを功、
かつを松魚、	からさを連枷、	さを竿、
とを十、	みさを操、	あをがへる蝦蟇、
みをつくし落標、	みつを鏡鈕、	をしなし劣弱、懦弱、
をつとせい膺膺臍、	ひをどし緋緘、	をち瘁、
しをん紫苑、	とをる撓、	こをばい紅梅、

ばせを 芭蕉、 をかめ 傍目、 をこたる 怠、  
 一音の語なると語の上中下なるとを問はず、總べてちに紛るゝことあり、こゝ  
 に出せる外はちの假字と知るべし。

ト	不、	まじる	交、雜、參、	なじる	詰、
く	くじる	扶、	に	は	は
く	くじ	挫、	か	は	ひ
や	やじり	鏃、	ま	あ	あ
ま	まじろく	隣、	た	し	ま
し	しじみ	蜆、	な	ま	ま
む	むじな	貉、	さ	み	み
か	かたじけなし	辱、	は	こ	あ
な	なじむ	馴染、	ひ	あ	あ

か	かじる	齧、	の	の	く
は	はじかみ	薑、	こ	こ	は
は	はじる	突、	ほ	ほ	み
い	いちじるし	著、	か	か	ま
め	めはじき	莞蕪、	め	め	に
き	き	雉、	う	う	く
つ	つ	辻、	は	は	さ
も	も	文字、	と	と	あ
あ	ある	響應、	う	う	お
む	むら	連、	ひ	ひ	つ
つ	つむ	鷺、廻毛、	い	い	す
あ	あま	瘰肉、	を	を	あ

ふ じ 富士、 こじき 癩病、 乞食、 かじり 咒詛、  
 ゑんじゆ 槐、 こじつけ 附會、 ひもじ 饑、  
 ずづと紛れ易ければずの假字の限りを出す、此の外は皆づの假字なりと知るべし。

- |   |    |     |      |     |       |    |     |    |     |    |     |     |
|---|----|-----|------|-----|-------|----|-----|----|-----|----|-----|-----|
| ず | 不、 | ず   | さ    | 從者、 | ず     | き  | 鱸、  |    |     |    |     |     |
| す | ずめ | 雀、  | す    | ろ   | 漫、不覺、 | す  | む   | 涼、 |     |    |     |     |
| す | ずし | 生絹、 | ぬ    | ず   | み     | 鼠、 | な   | ず  | ら   | ふ  | 準、  |     |
| た | ず  | む   | 付、   | す   | ず     | な  | 菘、  | ず  | る   | け  | る   | 怠慢、 |
| ず | ぼ  | ん   | 洋服袴、 | か   | ず     | 數、 | こ   | ず  | る   | 梢、 |     |     |
| か | なら | ず   | 必、   | は   | ず     | 筈、 | も   | ず  | 柚子、 |    |     |     |
| き | ず  | 疵、  | す    | ず   | 鈴、    | 錫、 | 篠、  | み  | み   | ず  | 蚯蚓、 |     |
| う | ず  | 警華、 | く    | ず   | 葛、    | す  | ず   | しろ | 蘿蔔、 |    |     |     |
| も | ず  | 鳴、  | 百舌鳥、 | じ   | も     | ず  | 數珠、 | う  | ず   | す  | まる  | 群集、 |

- |   |   |   |   |     |   |   |   |    |    |   |   |     |   |      |
|---|---|---|---|-----|---|---|---|----|----|---|---|-----|---|------|
| ま | も | ず | み | 黛、  | す | ず | り | 硯、 | は  | ず | む | 反跳、 |   |      |
| い | し | ず | る | 基礎、 | う | ず | く | まる | 躑、 | ひ | ず | き   | も | 鹿尾菜、 |

### 第三章 漢字

○吾人の文を綴るに重要な語は、皆漢字にて發表せられ、日用普通の言語も、亦漢字をもて發表せらるゝこと多し。漢字の數は、四萬七千貳百拾六字(字典)あり、其の中日常使用せらるゝものは、三四千を超ざるべしといへども、これが使用上の跡を検するは、今日に於いて決して等閑の業にあらざるべし。

○漢字を組織せるその一筆を畫と云ふ。例へば丁は一と一との二畫より成り、寸は一と一と、との三畫より成り、支は一と一とフとんとの四畫より成れるが如し。この畫の種類、すべての漢字にわたりて凡三十餘あり、これらは種々に組織せられて千萬の字體をなすなり。

○漢字は字形にて分類す。例へば松柏など字の左に木あるは木偏、講讀などは言偏、

組織などは糸偏といふ。又削棚など字の右にリあるを立刀、鴨鴉などを鳥の旁といひ、宮室など字の上にハあるをウ冠、蔓草などを草冠といふ。此の外、雁、歴などを尸の部とし、病痾などを疒の部とし、無、然などを心(忄)の部とし、盆、盃などを皿の部とし、空、突の如きを穴(宀)の部とする等、凡、二百十四に分類す、これを部首と名づく。

部首の特別の名あるものを挙げれば、左の如し。

- 人偏。 亻、行人偏。 彳、三水。
- 雁垂。 尸、麻垂。 疒、病垂。 冫、フ冠。
- 立心偏。 忄、手偏。 犭、獸偏。 欠、ケン旁。 アクビ。
- 連火。 灬、肉月。 示、示偏。 禾、ノギ偏。
- 門、門構。 門、水又。 貝、貝又。 貝、コ又。 走、之繞。
- 走、走繞。 貝、小貝。 頁、大貝。 邑、大邑。

小鳥、佳、古鳥。 西、曆鳥。

○漢字に種々の體あり。通常用ふるは楷書(眞)、行書、草書とし篆書、隸書、明朝などほこれにつぐものとす。今左に(天下)といふ二字にて六種の字體の異なるを示す。

- 楷書、天 下。 行書、天 下。 草書、天 下。
- 篆書、天 下。 隸書、天 下。 明朝、天 下。

○漢字の音は、即ち支那の語なればこれを漢字音とも字音とも音ともいふ。この音は我が國に傳りて多少原音を變じて一種の日本音となり、支那に於いても頗その古音を變じたる故に、今の支那音とは、全く別種の如くなりたるものなり。さて漢字は一字皆一音なり。支、微、歌、麻、虞、魚、壽、茶、菓の如きは固より一音に聞ゆれども、又東、京、則など二音の如くに聞ゆるものあり。そのう、い、く、の如きを韻の假字と云ふ。韻の假字は、い、ゐ、う、ぬ、む、ふ、つ、く、ち、

き。の十種に限る。例へば齊、階、税、害。水、瑞、追、類。刀、相、秋、用、長、教、要。文、桓、寒、山。侵、覃、鹽、咸。甲、蝶、十、納。拙、末、活。滌、菊、職。七、埒、八。益、昔、敵の如し。此の内ぬ、むの音は古よりんに變じて通例その別を立てず。

(注意) 明治三十三年八月文部省は小學校にて用ふる字音假字をば現今の發音のまゝに寫すこととし、井、ウ、フの韻を廢し、井はイとし、別に引音符を定むる等種々の改定をしたり。されどこゝには一千年間用ひ來れる假字の法を説けり。下章の字音假字遣も亦然り。

○漢字を音のまゝに讀むを音讀といふ。例へば天下泰平、侍史、迂生等の如し。國語に譯して讀むを訓讀又はよみといふ。例へば天、下、泰、平、侍、史、迂、生等の如し。又一字に二以上の訓あるものあり、例へば下は、しも、した、もと、ほどり、する、おる、など訓むべく迂は、とほし、まがる、ひろし、やや、など訓むべきが如し。

(注意) 熟語を音訓相交へて訓むを湯桶讀又は重箱讀といふ。例へば手代、手燭、旗師、小僧、重箱、竹輪、團子、並等、木賃宿、本丸などの如し。又漢字の偏と旁とに拘りて當て讀みするを百姓讀といふ。例へば姦婢(かんだう)と讀むべきを婢の旁は安寧の寧(ねい)と同じければ、こも姦婢(かんだい)ならむと讀み誤り、又玄(えう)の偏に力を添へたる幼の字の音はえうなるにより幻(げん)も亦えうの音ならむと讀み誤るが如し。前者は習慣によるものにて、しか讀まざれば通じ難し、されど、後者は時々讀み誤り易ければ、讀書作文の際特に注意すべきことなり。

○訓ありて音なき字あり。こは我が國にて創造せるものなれば、これを和字といふ。即ち辻、柵、鱒、凧、糍、怵、鷹、柘、禪、島、峠、凧などの類なり。又時鳥、流石、雲雀、草臥、五月蠅、一寸、なども我が國にて用ふる熟語にて唯訓讀するのみなり。

○漢語の音讀と訓讀と紛れ易きもの、又は數様に訓讀すべきものなどには、下に別に假字を添へて分り易くす、これを送假字といふ。例へば往く(ゆく)、往ぬ(いぬ)、行く(ゆく)、行る(やる)、行ふ(おこる)、故に(もろに)、故らに(ことさららに)、等の如し。又漢字の旁に假字を添へて記すを振假字といふ。

○我が國に使用せる漢字の中に、兩様の音を有するものあり。一を漢音といひ、一を吳音といふ。漢音とは支那古の漢地方(北朝)の音にて、吳音とは支那古の吳地方(南朝)の古音をいふ。吾人は漢語を使用するに當り、この漢吳兩音の區別を一通り辨へ知るを要す。もし然らざらむか、讀みて意味の解し難きことあらむ。例へば人民(じんみん)、法華經(ほけきやう)などを、人民(にんみん)、法華經(はふくわけい)などに讀むはいと不都合なるが如し。左に少しく漢吳音の差の著しき熟語を示さむ。

漢音 吳音 漢音 吳音

孝行	かうかう	行儀	ぎやうぎ	人民	じんみん	人夫	にんぶ
大變	たいへん	大工	だいく	經營	けいえい	經文	きやうもん
京師	けいし	東京	とうきやう	明瞭	めいれう	明日	みやうにち
足下	そつか	下賤	げせん	請求	せいきせう	起請	きせう
乾坤	けんこん	乾物	かんぶつ	人物	じんぶつ	荷物	にもつ
仰山	ぎやうさん	信仰	しんかう	内裏	だいり	町内	ちやうない
明月	めいげつ	五月	ごごわつ	權勢	けんせい	權現	ごんげん
九天	きうてん	九年	くねんば	半鐘	はんしやう	鐘樓	しゆろう
仲尼	ちゆうじ	僧尼	そうに	依頼	いらい	歸依	きえ
兵卒	へいそつ	兵粮	ひやうらう	西洋	せいやう	東西	とうざい
詩會	しくわい	會釋	くわいせき	名實	めいじつ	大名	だいまやう
間接	かんせつ	世間	せけん	形狀	けいじやう	人形	にんぎやう



○漢吳音の外に又唐音といふものあり。こは、支那との交通甚しく衰へたる後、稀に傳來したるものにて、前の二音とは大に異なり。唐音と呼ぶは蓋し唐土人の音といふ意にて、其の實歸化宋僧の所傳なりとぞ。今左に數例を示す。

- 行宮 あんぐう      行燈 あんどん      普請 ふしん
- 明朝 みんてう      南京 なんぎん      看經 かんぎん

(注意) 總べての字に皆漢、吳、唐三種の音を有するにあらで、中には漢吳兩音とも同一なるもの固より多し。但、この唐音は甚だ稀なり。

### 第四章 字音假字遣

○漢字の音を表はすに、一定の用法によりて假字を記すを、字音假字遣といふ。例へば異はい、胃はゐと書き、要はえう、葉はえふ、陽はやう、用はようと書き別くるが如し。又字音は、大抵字形の類似せる點より推知し得るものなり。例へば央の音あうなるを知らるときは秧、映、殃、映、盎、いづれもあうの假字と知るべし。

し。されども寺はじの假字なるに持、峙、痔、などはぢと書くが如き例も稀にはあるなり。

(一) あう、あふ、わう、おう、をうの別。

用ふべき假字	改定假字	漢字	摘要
あふ	お	押、鴨、狎、回、壓、	此の外は大抵あうを用ふ
わう		王、往、狂、旺、汪、皇、鳳、黃、橫、厓、	
おう		應、謳、鷗、歐、嘔、甌、毆、	
をう		翁、泓、甕、嫗、翁、	
(二) いう、いふ、さう、さふ、さう、さふ、の別。			
いふ	い	邑、悒、揖、楫、熠、	此の外はいうなり
いう		雄、熊、融、彤、勇、邕、	

い

愈、諭、逾、癒、庾、與、裕、(裕は常にいおうトヨム)

(注意) いおうは又おうと書きてもよし、

(三) い、ゐ、の別。

ゐ

い

爲、位、彙、胃、涓、謂、韋、擘、偉、緯、違、葦、圍、闕、惟、唯、維、帷、畏、威、尉、慰、遺、悲、委、透、萎、洧、鮪、饒、蔦

此の他は大

抵いの假字

ゐん

いん

尹、允、勻、筠、員、瀕、殞、隕、院、犹、吮、駟

なり

ゐき

いき

域、闕、械、洫

(注意) 阿列の下はいにして字列(く、す、つ、も、る、う)の下はゐなり。

(四) え、ゑ、の別。

ゑ

え

恵、慧、繪、回、廻、穢、淮、壞、畫、會、隈、烏、衛

ゑい

えい

越、鉞、楸、臼、粵、噉

此の他は大

抵えの假字

ゑん

えん

袁、遠、猿、猿、猿、園、苑、怨、宛、婉、璇、鴛、寃、爰、援、媛、瑗、媛、淵、圓、垣

なり

(五) れ、を、の別。

を

れ

乎、呼、烏、鳴、鳩、汗、惡

をく

れく

屋

此の他は大

抵れの假字

をつ

れつ

膾、越

なり

をん

れん

溫、蘊、穩、袁、遠、園、苑、苑、怨

(六) かう、かふ、こう、こふ、くわう、の別。

か

ふ

合、蛤、閣、洽、恰、甲、匣、狎、闞、盍、蓋、闔、嗑、溘、郃、鷓、鉀、夾、峽

こ

う

公、崧、工、紅、虹、功、攻、貢、空、控、腔、孔、鴻、洪、闕、肯、口、扣、叩、吼、苟、后、垢、逅、狗、鉤、後、寇、厚、候、候、喉

此の他は大

くわく	くわん	くわい	くわ	こ	こ
郭、廓、畫、劃、獲、擴	關、款、卷、圈、觀、灌、歡、鑼、躍、勸、冠、貫、慣、盪、丸、患、鑲	拐、詼	禾、火、瓜、夸、卦、化、戈、果、華、過、鍋、媧、回、灰、怪、晦、悔、乖、快、會、檜、繪、壞、潰、傀、槐、魁、膾	劫、怯、業、脅	猴、構、構、溝、購、籌、遘、肱、弘、薨、興、亘、恒、江、扛、肛、缸、絳、巷、港
				光、恍、晃、眈、眈、廣、曠、曠、曠、曠、荒、慌、皇、惶、惶、惶、鳩、篁、徨、黃、簧、橫、疊、宏、閑、轟、鏘	抵かうなり
				(七) か、くわ、の別。	
					此の他は大抵かの假字なり

くわつ	きふ	きゆう	けう	けふ	きよう
活、豁、滑、猾、闊	急、及、級、吸、汲、笈、給、翁、歛、泣、炭	弓、躬、窮、宮	教、喬、橋、驕、矯、矯、喬、堯、曉、澆、曉、翹、徹、竅、皎、校、交、絞、效、咬、郊、狡、効、狡、叫、肴、淆、殺、膠、爻、梟	叶、協、夾、俠、狹、挾、挾、愜、篋、峽、陝、業、劫、怯、脅	共、供、拱、恭、恐、鞏、蛩、登、凶、兇、恂、胸、匈、龔、頤、邛、興、兢、凝、矜
					此の他は大抵きゆうなり
					此の他は大抵きやうの假字なり
					(九) けう、けふ、きやう、きよう、の別。
					(十) きやう、きふ、きゆう、の別。
					(注意) きゆうは又きやうと書きてもよし。

さふ	雑、雌、匪、挿、嬰、甬、颯、	此の他は大抵さうなり
そ	會、僧、增、憎、贈、層、繒、臆、總、聰、惣、惣、送、宋、叢、宗、綜、踪、涼、崇、走、叟、葱、搜、瘦、奏、湊、輦、蔭、簇、藪、嗽、漱、蓼、稷、稷、稷、	此の他は大抵さうなり
(十一) しう、しふ、しゆう、の別。		
しふ	十、什、汁、拾、習、褶、摺、執、集、緝、輯、聳、揖、楫、澁、濕、	此の他はしうなり
しゆう	衆、終、充、嵩、翁、戎、從、縱、主、趨、戍、	
(注意) しゆうは、しうと書きてもよし。		
(十二) しやう、しよう、せう、せふ、の別。		
しよう	鍾、腫、衝、樞、鐘、誦、松、訟、頤、從、縱、蹤、縱、聳、春、悚、竦、茸、冗、稱、升、昇、陞、證、勝、丞、拯、蒸、承、澗、繩、仍、乘、剩、	此の他は大

せ	小、少、抄、鈔、宵、霄、逍、消、硝、峭、銷、鞘、稍、稍、	此の他は大抵しやうなり
せう	椒、召、昭、韶、沼、沼、招、招、照、焦、蕉、樵、樵、笑、燒、饒、繞、蕘、燒、擾、蕭、嘯、簫、瀟、	
せふ	妾、葉、攝、捷、睫、蹇、涉、浹、變、接、屑、	此の他は大抵たう
たふ	答、塔、搭、沓、踏、榻、蹋、納、衲、	
と	東、凍、棟、同、洞、桐、銅、筒、伺、恫、峒、童、董、懂、懂、董、動、慟、通、痛、桶、冬、冬、疼、蒙、形、統、豆、頭、逗、闘、剷、脰、斗、偷、偷、漏、透、竇、登、燈、橙、橙、澄、鄧、澄、藤、藤、騰、騰、等、兜、授、	此の他は大抵たう
(十三) たう、たふ、とう、の別。		
(十四) ちう、ちふ、ちゆう、の別。		
ちふ	塾、繫、	此の他は大抵ちう
ちゆう	中、忠、仲、沖、沖、衷、蟲、厨、踟、柱、注、註、駐、蛛、誅、	

ちよう		(注意) ちようは、ちようと書きてもよし。 (十五) ちやう、ちよう、てう、てふ、の別。
重、冢、寵、徵、懲、澄、穰、(穰は濁りてよむ)		
てう	ちよ	朝、潮、兆、挑、詔、窕、眺、趙、超、紹、調、凋、彫、鵬、翫、鯛、鯛、鳥、鳶、帛、條、刀、釣、肇、糴、量、尿、溺、燒、翽、帖、貼、牒、蝶、謀、疊、捻、聶、輒、
てふ		
(十六) なう、なふ、のう、の別。		此の他は大 抵ちやう
なふ	の	
のう	納、衲、農、膿、濃、能、	此の他は なう
(十七) にう、にふ、の別		
にう	柔、乳、	
にふ	入、	

にやう		(十八) にやう、ねう、ねふ、の別。
娘、娘、		
ねふ	捻、	此の他は ねう
(十九) はう、はふ、ほう、ほふ、の別。		
はふ	乏、法、(この方は漢音)	此の他は大 抵はうなり
はふ	乏、法、	
ほう	鳳、龐、豐、夢、晉、封、幫、奉、捧、棒、峯、蓬、烽、逢、鋒、縫、蜂、衰、戍、矛、牟、眸、蒙、濛、朋、崩、鵬、邦、蚌、培、剖、焙、某、謀、部、誦、菩、桴、仆、茂、	(注意) 法はほつとも呼ぶ。又ほうの中にほう、む、ふ、ぶ、も、もう、と呼ぶ字もあり。 (二十) ひやう、ひよう、へう、の別。
ほう	は	



(二十七) じ、ぢ、の 別。

ぢ	治、持、峙、痔、尼、膩、爾、柱、除、	此の他は じなり
ぢよ	女、除、杼、絮、蔭、	
ぢん	陣、陳、沈、塵、	
ぢく	竺、軸、舳、舳、舳、	
ぢつ	袒、昵、暱、帙、	
ぢき	直、	
ぢやく	濁、	
ぢゆつ	並、怵、	

(注意) 柱はぢゆ、除はぢよ、なれども、琴柱(ことこのぢ)、掃除(さうぢ)など書くときに用ふ。

(二十八) す、づ、の 別。

す	受、壽、手、	此の他は大 抵づ
すゐ	隋、隨、髓、瑞、惴、蕞、	

(注意) 手はしも、なれども上手(じやうす)など書くときに用ふ。

第五章 誤り易き語

○日常使用する語の中にて書き誤り易く、或は読み誤り易き語少からず。今左にそれらのかずかずを示さむ。

**あ** 幹旋(あつせん)は周旋の意、幹旋(かんせん)と書くは誤なり。◎欸乃(あいない)は船に掉し相應する聲なり、(あいない)とよむは誤なり。◎哀悼(あいたう)は悲みいたむこと、(あいたく)とよむは誤。

**い** 衣冠(いぐわん)冠を戴き袍を着、指貫をはきたる姿にいふ。冠を冠(こう)と誤

るべからず。◎一斑(いつぱん)一部のまだら、「一斑の美以つて全豹を察すべし」  
 など一端の意に用ふることあり、一斑と混用するは非あり。◎鵝蚌(いつぱう)一  
 はしぎ、一ははまぐり、鵝蚌の争とて二人利を争うて他のものに、その利を獲ら  
 るゝに喩ふ、これを(きつぱう)と讀むは誤なり。◎溢言(いつげん)賞め過ぎの意  
 (おきげん)と讀む勿れ。又狹隘(けふわい)のあいと紛るゝこと勿れ。◎委託(の  
 たく)まかすこと、托、託、託など、誤るべからず。

う 蓋奥(うんあう)おく深きこと、蓋は秘密の義あり、(おんおく)と讀むべからず。  
 ◎雨覆(うはく)、覆はわられなり、(うはう)と讀むは誤なり。◎僵僕(うろう)せ  
 むし又腰を屈むることをいふ (くろう)とよむべからず。◎胡蓋(うさん)茶人の  
 用ふる茶碗の名、胡をこと讀むべからず、胡亂を(うらん)と讀む類なり。  
 は 易簀(おきさく)死ぬること、曾子死に臨みてすのこを易へたる故事より出づ、  
 (いせ)と讀むべからず。◎烟筒(おんとう)は烟管と同じ、烟突(おんとう)と混

すべからず。◎遊撃(うげき)迎へ撃つなり、遊を(げき)と讀むべからず。

お 嘔吐(おうと)食物を胃より吐き出すこと、嘔を(く)と讀むべからず。  
 か 甲冑(かうきう)よろひ、かぶとのこと、冑と胃と混すべからず。◎乾燥(かん

さう)かわきて水分のなくなること、又無味(むち)といふ時は趣味のなきことなり、  
 これを(けんさう)と讀むべからず。◎攪拌(かうはん)掻き亂すこと攪を(かく)と  
 讀むべからず。◎誑亂(くわいらん)欺き亂すこと、誑を(けい)とよむべからず。  
 ◎睡甍(がらみ)にらむこと、(がらし)と讀むべからず。◎咳唾(がらだ)つば唾  
 をするを讀むべからず。◎行潦(かうらう)にはたみづとて、雨降りて俄に地上に  
 水の溜りて流るゝこと、潦を(れう)とよむ時は篠傘の東にある水の名となる、◎  
 好惡(かうを)はすきときらひひとの意、故に(を)とよむ時はきらひ又にくむの意に  
 て惡を(あく)とよむ時ははわるきの意なり。◎膏盲(かうくわう)一は上部のにて、  
 一は下部の心臓なり、盲を盲目の盲(まう)と誤るべからず。◎剛愎(かうひよく)



心強くしてもとること、復を復、腹と誤るべからず。

きつ巨擘(きよはく)大指なり、かしらの意、壁は又(つんぞく)と讀む(へき)と音讀すべからず。◎疆場(きやうばう)國界のこと、場を場と誤るべからず。◎九死(きうじ)十中の九までは死すの意なり、窮死と誤るべからず。◎筋肉(きんにく)筋を筋(ちよ)と誤るべからず。◎氣概(きがい)氣性のこと、氣概と誤るべからず。◎匡飭(きやうちよく)正し整ふこと、飭を裝飾(さうじよく)の飾と誤るべからず。◎義捐(ぎぬん)善き事に物を贈る意(ぎけん)と讀むは不可。捐はすつるなり。◎記念(きねん)を紀念と書くべからず、記は記憶にて紀は紀述の義なり。◎記憶(きおく)心に留めて忘れぬこと、覺の意、臆説(おびせつ)想像の説のこと(の)と誤るべからず、臆は胸の肉なり。◎狂酗(きやうく)醉狂の意(きよう)は(きよう)に非ず。

く擴張(くわくちやう)ひろげはること、擴を(くわう)と讀むべからず。◎鹽櫛(しつ)顔を洗ひ髪をくしけづること、櫛は櫛比(しつび)櫛風(しつふう)など

の熟字あり、これを(せつ)と讀むべからず。◎惶擾(くわうせう)おそれ亂ること、擾を(いもう)と讀むべからず。◎元旦(げんたい)の旦は(あした)なり且(しよ)と誤るべからず。◎譌傳(くわでん)譌は訛と同じ(ぎでん)とよむべからず。

け欠伸(けんしん)精神の疲れて口を開き大息をするを欠といひ、體の疲れてそり返りのびるを伸といふ。欠は即ち(あくび)なりこれを缺(けつ)と誤るべからず。

◎軒輊(けんち)優劣輕重の意、輊を(てつ)と讀むべからず。◎検査(けんさ)檢定、檢事などの檢は皆此の木偏なり、手偏の檢を用ふるは誤なり。◎計畫(けいかく)計り考ふること、畫を(くわ)と讀むは不可、繪の意となればなり。◎喫飯(けいはん)なり、喫の音に(きつ)なし、◎鬩牆(けいせう)家の内の争のこと「兄弟鬩に鬩ぐ」より出づ、鬩を(げい)と讀むべからず。◎絢爛(けんらん)あやありて明かなること、(じゆんらん)と讀むは非なり。◎怯懦(けふだ)おちおそること、(きよじゆ)と讀むべからず。

溝漚(こうけき)漚の漢音は(まよ)なり(こうけつ)と讀むべからず。田の限りを付くる水道といふ意。◎功績(こうせき)いさをしのこと効績と誤るべからず。

◎枯涸(こかく)―はもと、樹木の枯るゝにて、涸は水のかわきたるなり、これを(こ)と讀むは非なり。◎午牌(ごはい)―は晝の十二時をいひ、―はしるしのふだをいふ、眞晝のこと、(ごひ)と讀むべからず。◎告訃(こくけつ)人の惡をわばきて上に告ぐをいふ(こくかん)とよむべからず。◎根柢(こんてい)ねもとの義、柢を底と書くは誤なり。

◎雜沓、雜聞(ざつたう)共に混雜の意、沓はかさなる、又合ふなり、沓(えう)と混する勿れ。開は騒しきこと、之を(し)と讀むべからず。◎慘憺(さんたん)物凄きこと、憺を濫と誤るべからず。◎桑梓(さうし)古支那にて家々に桑とわづさとの木を植ゑて子孫に遺し鬻食に給し又は器用にそなへしことあり、この桑梓はもと、父母の植ゑしもの故に恭敬を加ふるなり、これによりて故郷の義に用ふ、梓

を(しん)と讀むは誤なり。

し師傅(しふ)師匠のこと、傳(め)のたとよみて守役の意に用ふ(を傳)と誤るべからず。◎祇役(しえき)―は謹み敬ふ意徳川時代に參勤交代の意に用ひしなり、祇を祇(ぎ)と誤るべからず。◎刺客(しかく)刺は(せき)とも呼ぶ、人を暗殺する者をいふ、潑刺の刺(らつ)と誤るべからず。◎弛廢(しはい)弛を(し)と呼ぶ時は(ゆるぶ)の意にて(ち)と呼ばば(落つ)の意なり。◎悚然(しやうせん)恐るゝ貌、(そくせん)と讀むべからず。◎輸出(しゆしゆ)正しく讀めば上の如し、されど(しゆつ)が世間の通語となれり、但、出は出師(しゆし)出納(しゆたふ)の時は(しゆつ)と讀まず、輸は輸贏(まけかち)の意の時(しゆえん)と讀む。◎銃砲(じゆうほう)砲の字、石偏は筒の意、火偏の砲は包み焼きの意なり、故に鐵砲、大砲の砲を炮烙の刑の炮と誤るべからず

す垂涎(すゑん)涎を流して物をほしがること、涎を(えん)と讀めば(水流るゝ

貌)となる。○揣摩(するま)自分の考を以て他の有様を推量すること(たん)と讀むときは(聚まる貌)となる。

せ脆弱(せいじやく)もろくよわきこと(き)とよむべからず。○選舉(せんぎよ)、(えらぶ)ときには選を用ひ、撰は著す意なり。○齊讀(せいどく)ひとしく讀むこと、書齋(しよさい)の齋と混すべからず。

そ漱滌(そうてき)洗ひ濯くこと、(そうどう)と讀むべからず。○付度(そんたく)推測する意(すんど)と讀むべからず。○綜核(そうかく)すべ兼ねること(がい)と讀めば檐(えん)となる。

た貪婪(たんらん)慾深くむさぼること、財には貪をいひ、食物には婪をいふ(ひんりん)と讀むべからず。○大達(だいさ)廣き街路、(たつ)と讀むべからず。ち砧杵(ちんしよ)きぬたの槌なり、(てんきよ)と讀むべからず。○沈滓(ちんし)なり滓を(さい)と讀むべからず。○地祇(ちぎ)地の神のこと祇を祇と書くは誤なり

り。○肘臂(ちうひ)ひぢのこと臂を(へき)と讀むべからず。○地殼(ちかく)穀物(こくもつ)の穀と混すべからず。○締裕(ちげき)葛(うすもの)の精密のを締といひ粗なるを裕といふ(さどく)と讀むべからず。○竹縁(ちくえん)縁を椽(たるき)と書くは誤なり。

つ杜撰(づざん)詩文著述などに亂雜なる文字を用ふること、こは唐音なり、(とせん)と讀むは非なり。

て恬退(てんたい)やすく退くこと(くわつ)とよむべからず。○殄戮(てんりく)亡しつくすこと(ちん)と讀むべからず。○倜儻(てきたう)他人の束縛を受けずしてすぐれはしひまなるをいふ(しもう)とよむべからず。○敵愾(てきがい)敵に對する心の強固なること(き)と讀むべからず。○天稟(てんびん)天より受け得たる性質の意、稟を(りん)と讀めば倉の意となる。○提撕(ていせい)ひつさぐること(ていし)とよむは非なり(し)といふ時は斯と同じ。

と 偷閑(とうかん)すぎまをぬすむこと、(と)とよむは非なり(と)の時は薄し、輕々しの意となる。○臀肉(とんにく)るさらひの肉、(でん)と讀むべからず。○到底(どうてい)結局の意、底を抵と誤るべからず。○讀點(どうてん)文章の(讀)の印に打つ點(ゝ)を用ふなり、句點(〇)を用ふと續げて句讀點といふ(とくとん)と讀むは不可なり。

な 儼(な)の音讀、(なん)とよむは誤なり疫鬼を驅る儀式に用ふる字、おにやらひと訓む。○捺印(なちゐん)印を押すこと、(な)とよむは誤なり。○内帑(ないたう)帝室の御費用に供する財貨を納むる倉庫なり、帑は(と)の時は妻孥の孥に同(と)たうの時は金庫の意となる、世間に(ない)とよむは正しきものにあらず。

ねに 肉袒(にくたん)肩をぬぎて肌を露出すること(にくそ)と讀むべからず。○饒舌(ねうせつ)喋々としやべること(げふ)とよむは誤なり。○佞辯(ねいべん)へつらひ邪ヨロシキなる辯舌、佞を佞とかき辯を辨とかくは非なり。

の 濃密(のうみつ)こまやかにしげきこと、密は疎密、綿密、緻密、秘密、親密、など熟字いと多し、蜜(はちみつ)と混すべからず。

は 稗史(はいし)小説の意、(ひ)と讀むべからず。○破綻(はたん)敗れほころぶること(てい)又は(ちよう)と讀むべからず。○白哲(はくせつ)白き義なり、哲學の哲(てつ)と混すべからず。○俳諧(はいかい)發句のこと俳を誹(ひ)と讀むべからず。○敗衄(はいちう)軍に敗るゝこと(ちん)とよむは誤なり。

ひ 丕績(ひせき)大なる功績なり(ふ)とよむべからず。○避暑(ひしよ)暑熱をよくるあり(へき)と讀むは不可あり。○皮相(ひさう)表面のこと皮想と誤るべからず。又相は人相、血相などに用ふ。宰相(さいしやう)の時の官名の如きは(さう)とは讀まず。

ふ 紊亂(ぶんらん)共に亂の意、(びん)と讀むは誤あり。○分析(ぶんせき)わかつこと、拆(たく)、折(せつ)と誤るべからず。

瓢箪(へうたん)瓢箪、箒等などの箒を算と誤るべからず。○睥睨(へいげい)に  
らむこと(ひ)と讀むべからず。○嬖人(へいじん)氣に入りたる人、(へき)とよむ  
は誤なり。○貶黜(へんちつ)官爵などをおとしさぐるにいふ。黜を(しめつ)と  
讀むべからず。

ほ 煩惱(ぼんなう)人間の慾望、苦慮などの煩しくなやましきをいふ惱を腦と書き  
誤るべからず。○楛克(ぼく)税を過分に取り立つること(ばい)と讀む勿れ。

ま 埋没(まいぼつ)うづむること埋を(り)と讀む勿れ。○孟陬(まうそう)陰曆正月  
のこと陬を(しゆ)と讀むべからず。

み 未曾有(みぞう)これまでになきこと(みそ)と讀むは非なり、又未(み)は  
未(まつ)と異なり。○密諭(みつしん)密告の意、諭を(ぬん)と讀むは誤也。

む 矛盾(むじもん)前後不揃なるにいふ、矛を(ぼう)と讀むは漢音なり、盾を(とん)  
とよむ時は人の名に限る。

め 明晰(めいせい)明なること晰を(せつ)と讀むべからず。

も 文盲(もんもう)文字を知らざるもの、文を(ぶん)と讀むは漢音にて文學、作文、  
などの時に讀み、吳音にては天文、經文、無學文盲などによむ例なり。○模範(も  
はん)模は木偏なり。手偏に書くは非なり。

や 冶金(やきん)金屬中より、その中に含まれ居る或金屬をふきわくる方法なり、  
冶を治と誤るべからず。○野率(やしゆつ)眞率と同じ即ち素朴にして飾らざるこ  
と、率を(りつ)と讀む時は比率などいひてわりあひの意となり、又(すむ)とよむ

時は將率、元率(元帥とも書く)など、軍隊のかしらの意となるなり。

ゆ 由緒(ゆじゆ)傳へ來れる理由、(ちよ)とよむは非なり。

よ 容喙(ようかい)人の談話最中に傍より助言すること、(ようたく)と讀むべから  
ず、(たく)は喙なり。○抑遏(よくわつ)抑へ止むること、遏を(かつ)と讀むは誤  
なり。

ら 懶惰(らんだ)懶はものうし、氣力乏しきなり(らい)と讀むべからず。◎磊柯(らい  
 いら)小石多き貌、又、人の卓越せるにもいふ、柯を(か)と讀むべからず。◎爛  
 漫(らんまん)花などの咲き盛りなるにいふ語なり、漫を慢と書くは非なり。◎螺  
 階(らかい)螺旋狀に造りたる階段なり、螺を(る)と讀むべからず。  
 り 隆崇(りゆうしゅう)山など高きことにいふ語、崇を崇(す)と誤るべからず。  
 ◎隆準(りゆうせん)高き鼻のこと(り)と讀むべからず。◎羸慙(るゐはい)よわり  
 る 涙痕(るゐこん)涙のあと(れい)と讀むべからず。◎羸慙(るゐはい)よわり  
 つかるよこと(えいび)と讀むべからず(えい)は羸(かち)と羸(解)く又は餘る(と)な  
 り。  
 れ 令謚(れいし)よきおくりなどいふこと謚(えき)と混すべからず、謚は笑ふ貌な  
 り。◎簾鉤(れんこう)すだれかけ、鉤を釣(てう)、釣(きん)と誤るべからず。◎  
 連署(れんじよ)他のものと共に姓名をかきしるすこと(れんちよ)と讀むは誤なり。

ろ 犁鋤(れいじよ)すきのこと、犁を(り)とよむ時は斑牛のことなり混すべからず。  
 ろ 肋骨(ろくこつ)あばらの骨あり、助(ぢよ)と混すべからず。◎輅車(ろしや)天  
 子の御車のこと輅(らく)、かくは車前にある横木の意(か)と讀む時は迎ふといふ  
 意となる。  
 わ 蒼蔚(わいゐ)盛なる貌、(くわい)と讀むべからず。◎矮屋(わいをく)小き低き  
 家(ゐ)と讀むべからず。  
 ゐ 畏肅(ゐしよく)おそれつゝしむこと肅を蕭條の蕭(せう)と誤るべからず。◎慰  
 藉(ゐしや)慰めやすんずる意、篇籍(へんせき)と誤るべからず。  
 ゑ 會釋(ゑしやく)挨拶と同じ(くわい)しやくと讀みて解釋(かいしやく)の熟字と  
 混すべからず。◎圓滑(ゑんくわつ)まどかにして滞らざること滑を(こつ)と讀む  
 ときは亂る意又は治る意ともなるなり。  
 を 嗚咽(をえつ)むせび泣きのこと咽を(いん)と讀めば咽々と重ねて鼓の聲の貌と

なり、又(えん)といふ時は咽喉(えんこう)と熟字してのんどの意となる、世間に  
(いんこん)と呼びなすは正しからず。◎越訴(をつそ)訴訟の順を経ずして直に上  
官に訴へ出づること、今日の地方裁判所に訴ふべきを直に控訴院に訴ふるに同じ、  
越は漢音にて(るつ)、吳音にては(をち)なるを促音に(をつ)と呼べるなり。

中等國語の準備終

附 録

◎兵卒の妻

雲 黒く風寒し、  
そよぐ時雨のおとなひを、  
袂いだきて獨言、  
月高く霜白し、  
ひとりねの床冷かに、  
此の時にかではさる、  
衣ちぎれ髪亂る、  
細き烟を立てつゝも、  
稚子脊に神詣で、  
去にし秋來たる冬、

更けゆく小夜のみ空より、  
聞きても早くぬれそむる、  
あはれわがせは今いかに。』  
鶏の八聲も果つる頃、  
燈くらぐ物淋し、  
あはれわがせは今いかに。』  
やつれし姿も知らずして、  
赤き心の一筋に、  
あはれわがせは今いかに。』  
夢か現か白雪の、

深くもつもる満洲の、  
生命のあらば言傳てよ、

◎吉野の櫻

芳雲靡くみ芳野の、  
匂うて昇る朝日影、

野營やいかにつらからむ、  
あはれわがせは今いかに。  
花の曙おぼるげに、  
御陵わたり雪ぬくし。

◎旭の御旗

亞細亞の空に輝ける、

朝日のみ旗奪はむと、

ねらへる荒鷲、

いかに猛きも我が旗の、

閃く風にはなびきけり。

隣國とるに味馴れて、

瑞穂を刈るも東の間と、

誇るスラブ賊、

見よや世界を守る旗の、

閃く風にはなびきけり。

◎甲辰九月朔、弟家悦見徴服兵役、賦以送之、

頭は菊月ついたちの、

東雲白む朝ぼらけ、

勇みていづるはらからの、

かひくしくぞ見ぬにける。

そも今日の日ははらからの、

第五師團に入りたむむ、

こよなきよごと重ねべき、

いともうれしき日なりけり。

いで父君の言の葉を、

よく味へよ汝が持てる、

その杯のみきよりも、

味多き其のおほせ。

また母君の真心を、

よく思へお前、

飛びもしぬべき伊勢海老の、

赤き色にもあらはれぬ。

あはれ目出度今日の日を、

なごかはたにもだすべき、

ましてなづさふ汝なれば、

いざはなむけむ一言葉。

見よやたなびく黒雲は、

北のはてよりひんがしに、



飛びつゝ空を覆ひけり、  
 疆域いかに狭くとも、  
 軀幹はいかに小くとも、  
 みめぐみ深き大君の、  
 陸にも海にもいさましく、  
 國家安危の秋にしも、  
 男子と生れし身の譽、  
 銃うつわざも太刀わざも、  
 よし散る時の來りなば、  
 たちまちとよむ萬歳の、  
 いばしが程は鳴りやまで、  
 登る朝日ともるともに、

憎さも憎し露西亞國、  
 仁義に富みし大八洲、  
 忠勇まさりし大和武士、  
 詔のまゝに進みゆき、  
 はらひきためよ露西亞兵、  
 御供の列に入りにしは、  
 つくせ本分守れ操、  
 つとめはげめよ東の間も、  
 匂ふ櫻の花とちれ、  
 諸聲高し柴の戸に、  
 集ひし人もことほきぬ、  
 いさみいさみて門出する、

汝が心こそおかしけれ、

あはれうれしき今日の日や。

今泉定介云、とりくくに面白し、別にいふべきふしなし。

本歌段落あり、章法あり、叙述整然恰も韓退之の文章を読むが如し、正にこれ  
 漢文の語脈より脱化し來りしもの、一讀再讀飽くを知らず、敬服々々

明治乙巳春三月下浣

福屋石風子拜批

◎漁村

彌生の空の朝ぼらけ、  
 漏るゝ自然の筆の花、  
 夏の暑さも白波の、  
 すぎゆく蟹の家毎に、  
 秋の夕の暮つかた、  
 いつしか銀波静まりて、

浦回をめぐる霞より、  
 漁家の廂の桃赤し、  
 上に鷗鷺を伴ひて、  
 夕陽十里網の影、  
 磯邊にかへる漁舟、  
 三十六灣月白し、

石風子云、白眉。

冬の夜明に風牙をて、  
残月凍る天のはて、

まだき破る、漁父の夢、  
水禽一群聲寒し。』

◎須

磨

夕波の音も松の音も、  
住居ひて見たき心根を、

すみ渡りつる須磨の浦、  
とむる關てふ趾いづこ。

◎明

石

昔をしのぶ遊子来て、  
げにや眞珠の形見よと、

こゝに一夜を明石潟、  
見ればさやけし秋の月。

◎鹿の鳴くころ山里へ遣す文

時雨ひまなき今日この頃、山里のけしきひとしは哀ふかう候ふらむ。梢を拂ふ風さへ  
淡紅にはの見ゆる曉なといかばかりをかしう眺めさせ給ふらむ。まいて妻こふ小男

鹿の音もさぞかしと思ひ侍り。よしや、み庭の木の葉はまだ蜀の錦に染ますとも御住  
家うちおどろかしまゐらせたうこそ。はかほかのみやびをにさきがけて紅葉ふみわ  
けなく聲の聞かまはしうて『もみぢする木の下蔭に宿りして鹿のなく音を君と聞か  
なむ』かりそめのぬざめにまでひとりこたるを只推しはかり給へかしあなかしこ。

◎壬寅の年の暮の詞

いとも神さびたる古き祠の木々に木枯の音さゝて氷の床になくをしの一聲もいとか  
なし。かゝるあたり菅の根のなが住ひしてはや二十あまりの年月をへたり。おも  
へばげに春の花も秋の月も夢に夢みしごとくわどかたもなく過ぎ去りしてそあさま  
しけれ。まいて今年もはつか一日二日ばかりとなりし心細さいはむ方なくさうざう  
し。おのれさしたることなくだゞしづはたのをさまされるにめなれてよしなき唐詩な  
どにおのがみの拙きをかちつゝあなるもよそめにはかたはらいたきなむゆり。今  
宵もまゐるまですゝけたる行燈のかけにはしたなき唐詩おもひいでよ。

妻乳女兒眠食寧。最欣父母未頽齡。讀書唯恨年還盡。燈火依然一穗青。

また筆とりてみ國ぶりも

ゆくこまの早きわかきに一年もあふみふみるひまに暮れけり

几頭のつらつる爐畔のあぐらいづれか物思ふつまならざるべき。よろづにいたりすくなき身にしあれば今更なげくともなとて甲斐やはある。あはれ世の聖人君子ののせし汗牛充棟の書物矢竹心にいそしめど時は過ぎやすく理はさとり難くおのが心にうるところげに九牛の一毛とやいひてまし。この限あるちからもてかの限なきふみいかでか讀み果つべき。あな心もとなのこどやと打沈める折からふと頭もたぐれば學びの窓の梅の影いとも寒けき姿見也。雪や苔を鎖すらむ。嵐や枝をしほるらむ。されどこの梅や花咲く時あらむ。實を結ぶ折やあらまし。獨をぐらき燈火の前なるこの影のみはとこしへに花咲き實る時やなからむ。このまゝ苔の下にかと思へばあはれさいやませとこもまたうき世の習ひなればいかはせむ。どかう思ひめぐらす

う○ち○夜○や○ふ○け○し○。明○鴉○の○一○聲○二○聲○鎮○守○の○杜○の○梢○に○も○る○ぞ○あ○は○れ○ふ○か○き○年○の○暮○れ○な○り○  
け○る○

くれて行く年を惜まむ人にこそ梅の花咲く春は來ぬらめ

五弓雪溪拜讀

◎長州下關なる筋が濱に遊ぶ記

明治三十七きのえたつ正月五日れのが知人なる下關の廣瀬信太郎ぬしの許に物しつ。八日に晝餉すまして主人と共に遊びありく。おのれは導かれて右にをれ左にまがりてこいしき岩根をたどりやつをふみ越えぬ。春とはいへど名のみにて吹き來る山嵐身にしみていとわびし。あな面白からずの日やなどみそかにつふやきつゝ、小高き處に登りて見渡せば、思ひきや、目も遙なるわだつみに逢はむとは。あるかなきかに心細げなる淡墨の眉はのかなるあたりは、高麗かしらぎか。白雪のくだくる如き浪いみじら騒しければ

こし方の風の寒さやうへならし白波さへも雪とこそちれ

福屋石風子云ふ、この歌紀行文中の歌として傑作。

わたりの枯草かきあつめて敷物どなししばしが程み空に續く海のはてうち守りつゝ  
腰なるひさをとり出で、傾け盡したればにや。心はかつく春めきけり

波のほも花とぞ見ゆるゑひくく顔は櫻の色に匂へば

又云ふ、この歌も面白し。

かくてもてこし遠目鏡にてのぞめば、真向ひに横れる島など手にとるさまなり。こ  
ゝを下りて磯邊の小石を拾はむとて、葛折を下りゆけば、足元よりうちつけにを波め  
浪のよめきたつさまいとすさまじ。波打際にたてる太き巖は、いづこのたれが手  
か雄命に祈りて据ゑしものにかと思はれてをかし、さはいへこの黒色したる巖に、  
八重波のよせきて、粉微塵に碎くるいきほひ、王良に鞭れて白き駒のみ空に蹴上が  
るかど見づるまに、かなたにひきかへす風情亦一きは勇し。さながら造父にれうせ

られたる荒駒の後へをかへりみずて慕直に雲に駐け入るかどこそ覺ゆれ。その神々  
しさいはむやうもなし。そもこの磯はいかゞ呼びつると問へば、主人はゝるみなが  
ら筋が濱どいらへたれば

いつこよりくる白波か一筋に筋が濱べによせかへるなり

そもくこゝに來てすが、しさを覺ゆるはかくめざましき境に立てばこそあれ。  
きのふはひんがしなるおのが庵にありしに、今日は西のはてなる旅の空にて、常に  
目なれぬ景色を見ることよ。かの龍に乗るらむ山人もおもはれて、いともうれしき  
わざなりや。日脚傾くまゝに磯邊傳ひに歸りなむとするに、ふと黄石公のそれなら  
で、黒と青との斑あるらうたき石に逢ひたり。真中にくぼみありて、おのづから硯  
のけはひせるこそ面白けれ。おのれうれしくいていへづとにせむとて袖にすれば。主  
人のわらふこと限りなし。この夜燈火のもとにかのらうたき石に墨すりてかくなむ。

今泉定介云ふ、思想古に傾かず文詞今に流れず、能く古今を調和して緻密に眞景

をうつされたるは老練といふべし。歌もいふべきふしなし。敬服々々。  
 田中宇三郎云ふ、王良造父が駿馬にむちうちて走るが如き君が漢文の才筆を以て  
 和漢混合文を書き給はむには如何にめでたからむと、この擬古文をみるにつけて  
 そ思ひ出てらるゝ。

補遺

(一) 助詞

○助詞は他の詞に添はりて、その意味を助くるに重要なものにて、獨立しては用  
 をなさぬものなり。今その用方を區別して畧例を左に示す。

- 一、打消、で、例言はで思ふを言ふにまされる。
- 二、希望、ばや、がな、例心あらむ人に見せばや○世の中にさらぬ別れの無くもがな。
- 三、命令、よ、例見よ現今學生の狀態を。
- 四、禁止、な―そ、な、例枝をな折りそ○馬より落つな。
- 五、連辭、が、の、つ、や、例家光は家康が孫なり○春の彌生のあけぼの○沖つ白  
 波○余は數學や國語やを勉強す。
- 六、強辭、し、を、例舟をしど思ふ○濡れてを行かむ小夜は更くとも。
- 七、指定、は、も、の、が、ぞ、なむ、こそ、を、をば、例この本は面白し○義經

●範頼も皆亡されぬ○風の吹きて花のちりけり○余が言を聴け○花ぞ散りける  
○花なむ散りける○花こそ散りけれ○驕を極む○手紙をば友人に届く。

八、指示、に、へ、例君は學校に行くか○雁はいづ方へ飛び去りけむ。

九、比較、と、より、例彼と此どいづれか善き○黒より白は遅し。

十、程度、ばかり、のみ、だに、だも、さへ、すら、より、まで、例世に書籍ばかり  
尊きものはなし○我のみ知る○立錐の地だになし○人として鳥にだも如かざる

べけむや○花美しきに實さへいと香し○禽獸すら孝を知る○いつの頃より武士  
の帯刀は廢せられしか○童までに物賜れり。

十一、決定、かし、ぞ、例誠に謹むべき事ぞかし○天地の神々も照覽あるべきぞ。

十二、疑問、や、か、例雨や降るらむ風や吹くらむ○面を撲つものは花か雪か。

十三、反動、や、か、やは、やも、かは、かも、例思ひきや○誰か知らむ○梅の花  
色こそ見えぬ香やは隠るゝ○をのとやも空しかるべき○憂きは物かは○長々し

夜をひとりかも寝む。

十四、接續、と、とも、ば、と、とも、に、が、て、にて、例わが校の選手は勝て

りといふ○勝ちたりとも色にあらはさず○さびしくば書を友とせよ○苦しけれ  
と屈せず○見れども見えぬ○いと物悲しと思ふに時雨さへそゝぐ○行きて見し  
が何の事もなかりき○夜更けて月出でたり○筆にて字を書く

(二) 語同じくして迷ひ易きもの

何、代名詞、例、何に包まむ。 何をかせむ。

何、副詞、例、花にわかでなに歸るらむ。

何時、名詞、例、いつともわかず。 いつをか待たむ。

何時、副詞、例、いつ來む。 いつ見むとてか。

將(はた)副詞、例、野邊の色を見るにはた春の山も忘れられて。

將(はた)接續詞、例、秦歎漢歎將近代歎。

且、副詞、例、降る雪とかつ知りながら。

且、接續詞、例、詩を吟じ且文を作る。

また、副詞、例、宜雨亦宜晴。今日復來る。

また、接續詞、例、山又山。往き又還る。

すなはち、或、副詞、例、百尺は即ち一丈。如是者或有焉。

すなはち、或、接續詞、例、思へば則ち得。文或は武。

など、(何故)、副詞、例、など行かざる。

など、(等)、接尾語、例、詩歌などの樂み。

(三) 十二ヶ月の異名并に時刻

○正月を睦月、初空月、初見月といふ○二月を如月キツラキ、梅見月、小草生月ヲクサオヒツキといふ○三

月を彌生月、櫻月、花見月といふ○四月を卯月、卯の花月、花殘月といふ○五月

を皐月サツキ、立花月、月見す月といふ○六月を水無月、風待月、鳴神月、常夏月トコナツツキとい

ふ○七月を文月、七夕月、涼み月、女郎花月といふ○八月を葉月、秋風月、月見

月といふ○九月を菊月、長月、紅葉月、月覺月といふ○十月を神無月、時雨月、

初霜月といふ○十一月を霜月、神樂月、雪見月といふ○十二月を四極シムメ、師走シフユ、深冬

月フシキ、年惜月といふ。○子の刻は午後十二時○子の半刻は午前一時○丑の刻は午前

二時○丑の半刻は同三時○寅の刻は同四時○寅の半刻は同五時○卯の刻は同六時

○卯の半刻は同七時○辰の刻は同八時○辰の半刻は同九時○巳の刻は同十時○巳

の半刻は同十一時○午の刻は正午十二時○午の半刻は午後一時○未の刻は同二時

○未の半刻は同三時○申の刻は同四時○申の半刻は同五時○酉の刻は同六時○酉

の半刻は同七時○戌の刻は同八時○戌の半刻は同九時○亥の刻は同十時○亥の半

刻は十一時なり



明治四十年二月廿四日印刷  
同年三月二日發行

\*\*\*非賣品\*\*\*

編纂者 紀本國吉

廣島市廣瀬村百八拾參番邸

發行者 木村喜

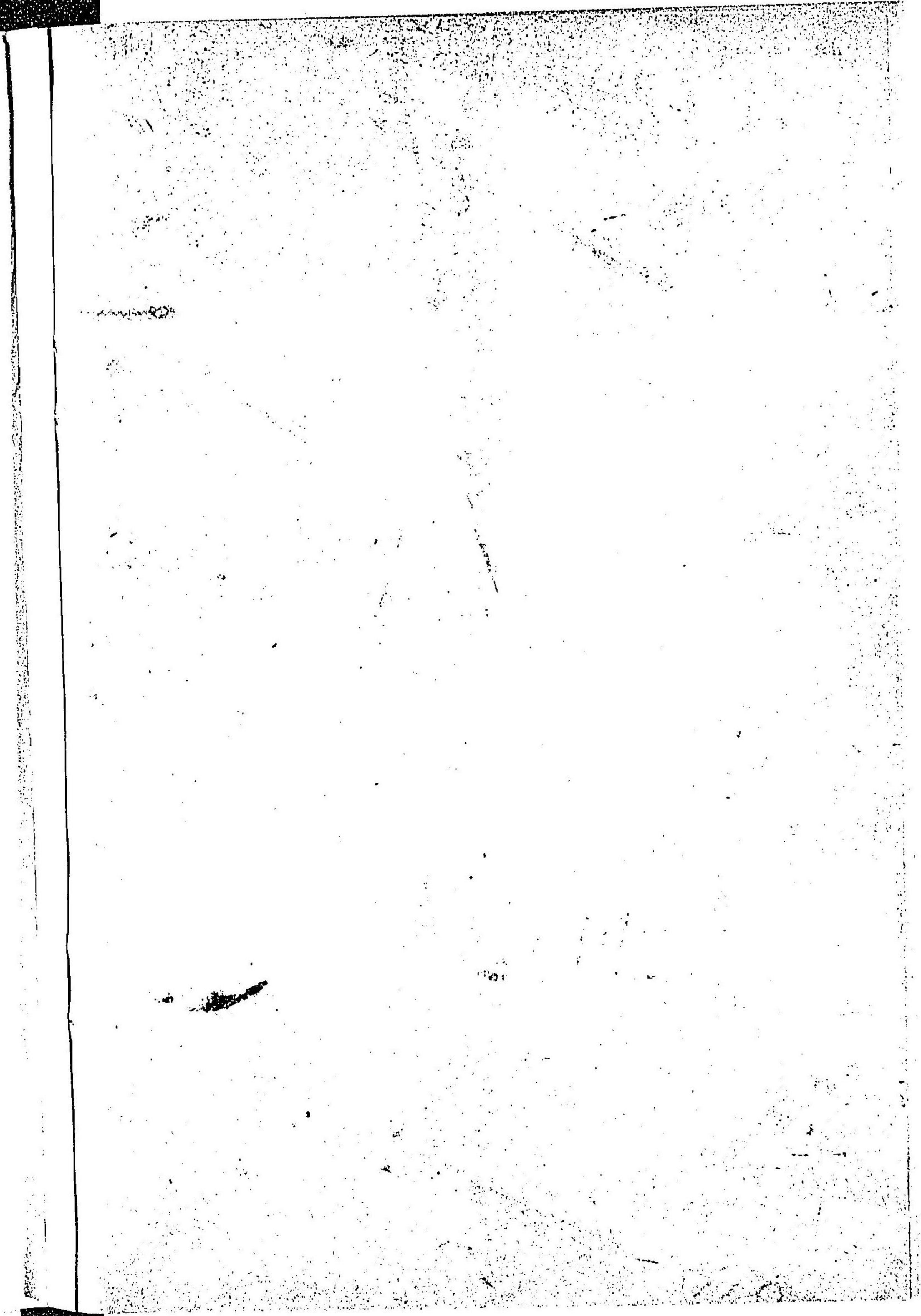
廣島縣佐伯郡己斐村四拾參番邸

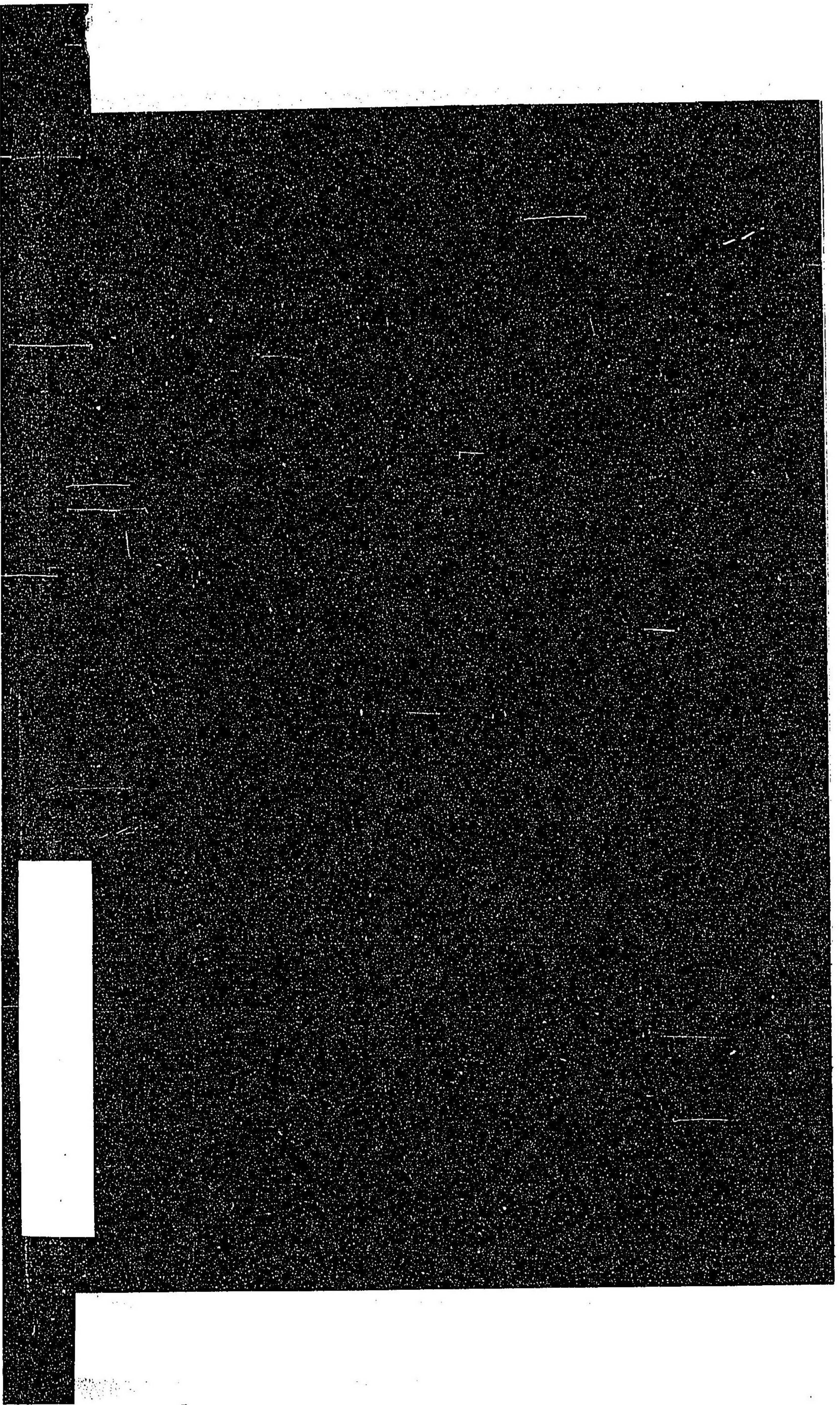


印刷者 增田直吉

廣島市壘屋町拾四番邸







特45

171

中等教育

国語の準備

国立国会図書館

076898-000-5

特45-171

国語の準備

紀本 国吉/編

M40.3

DAC-0061

